R＊B

しゃヴぇ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒ＊Ｂ

【Ｎコード】
Ｎ１３２０Ｑ

【作者名】
しゃヴぇ

【あらすじ】
『Ｒ＊Ｂ』
敵対するから、戦います。
対立するけど、一緒にご飯を食べます。
『甲本スイカ』の妄想で語られる、殺し合うほど仲の良い「赤式家」と「青式家」の物語。

1　赤と青の密会　＋　序文（前書き）

やりたい事を全部詰め込む予定です。
物語として成立しないと思います……

1　赤と青の密会　＋　序文

断片１

私は沢山の名前を持つ。
彼女はそう言った。
あの時の私は、彼女の言葉を理解できなかった。
でも、今ならわかる。
何故なら、私も沢山の名前を持っていたからだ。

序文１　物語の導入。もしくは準備体操。

この物語は、私の主観から見た世界で出来ている。
私というフィルターを通して語られた世界。
つまり、現実を元ネタとした作り話だ。
その程度の話だという事を覚えておいて貰いたい。
この『物語の導入。もしくは準備体操』で説明するのは、この物語を楽しくする方法である。
それだけこのお話は退屈なものである。
例を三つ挙げるので、退屈だと感じたときに試すと良いかも知れない。
?.読むのをやめる。（二番目にお勧め）
?.物語中出てくる名称の元ネタを考える。
?.語り部の性格をノートにメモする。
この楽しむ方法を試して、それでも退屈ならば楽しくなる方法を考えるのも良いかも知れない。
一番のお勧めは、本編中に埋めて隠しておくので、それを探すのも楽しいかもしれない。
さて、自己紹介をして序文1を締めくくろう。
私の名前は甲本スイカ。
塩をかけて食べると大変美味しい甲本スイカです。
以後お見知りおきを。

本編1　赤と青の密会。
「終わってはいけない争いがあるということを君は知っているか？」
赤式ヤンバル二十一歳女性はそう言って、テーブル中央にあったサラダにフォークを突き刺しました。
私は怒ってます。というヤンバルの意思表示です。
だいぶ前に私が提案したことを今でも続けてくれるヤンバルは素敵です。

つまり、私は何度もヤンバルを怒らせているということです。
「君はなんて馬鹿な事を言うのだ。もう戦うのはやめようだと？　私達は戦う為に作られたのだよ？　戦いこそ私達の存在理由だ」
声を押し殺して語るヤンバルですが、口元は笑っています。
つまり、彼女は怒るのを楽しんでいます。
私はその事を彼女から教えてもらっていたので知っています。
「終わってはいけない争いってのは、赤式家と青式家の戦いの事だよ。わかるか？　わかるよね？」
ヤンバルは二本目のフォークをサラダに突き刺しました。
私は彼女をワザと怒らせているつもりはありません。
私がヤンバルを怒らせようとすれば、彼女はへらへら笑うだけですので。
「私は怒っているのだよ。何に怒っているか説明しよう。説明させてくれ」
ヤンバルは息を深くゆっくり吸い込んで、短く吐きます。そしてフォークを抜いたサラダを手に持ちました。
「君にだよ青式ナナエ！」
ヤンバルは怒鳴ると同時にサラダをぶちまけました。私は頭からサラダをかぶりました。
私は毎回サラダをぶちまけられているわけですが……　別に嫌ではないのです。
私に食器を当てないように細心の注意を払ってぶちまけるヤンバル心遣いを思うと嫌なわけがありません。
「青式家現当主であられるナナエちゃんから食事に誘われて、たまにはいいかなぁと思って私はホイホイ来てしまいましたよ。楽しいお食事会ですよ。しかしだな、私達は敵同士だ。今回は特例中の特例。あってはならんことだ。次に会う時は殺し合いをするんだからなぁ」
テーブルを両手で叩き、ヤンバルは立ち上がりました
そろそろ他に行こうって事ですね？　了解しました。

「楽しいお食事会！　今日は楽しいお食事会だろうがこの野郎。どれだけ私が楽しみにしてたと思ってんだ畜生が」
ごめんなさい。と私は謝ります。
「違う違う違う！　その言葉は使ってはいけないんだよ！　ナナエちゃんはごめんなさいなんて私に言っちゃいけねぇんだよ！　忘れたのかこの野郎……」
私はごめんねと謝りました。
「表出ろ！」
そう叫んでヤンバルは伝票を手に持ちレジまで歩いていきました。

＊

「えー、表出ろと言ったのはいいのだが、何をするか考えてなかった」
赤式ヤンバル二十一歳彼氏募集中の女性は、そう口にしました。
とりあえず歩きましょうと私は提案します。
その提案をヤンバルは受け入れます。
テクテクと深夜の街を私とヤンバルは歩きます。
ヤンバルはとても強いので、怖い人が襲ってきても骨まで炭にしてくれるでしょう。
「ナナエちゃん、この前うちのエコーとタイムスの二人をバラバラにしたでしょ？」
そう言ってヤンバルはタバコを咥え、火をつけました。
エコーとタイムス。二人は確か赤式の人ですね。でも覚えがありません。
覚えてないので私じゃないよと答えました。
「あの二人、どっちがどっちだかわからなくなるほど、ミンチになってたよ。相変わらずナナエは残虐というか……」

私じゃありません。ともう一度ヤンバルに言うと、彼女は笑いました。
「二人はナナエにミキサーされたとしか考えられんがなぁ。まあいいや。どうせ代替えするだろうし」
結局、私達は殺しあう事などしないのですね。と私はヤンバルに言いました。
するとヤンバルは珍しく、そうだな。と答えました。
「私は今のナナエちゃんは嫌いじゃない。なんというか……　先代のナナエが酷かったせいか、嫌いになれんのだよ。おかしいかねぇ？」
んー、おかしくはないです。全然問題ないです。
むしろ、それを私は望んでいます。
「良かった良かった……　ん？」
どうしました？　なんですか？
「おい、あれって……　青式ヤオとうちのボンじゃん」
どれどれ……　あらまあ。青式家の男児と赤式家の男児がこんな夜中に仲良く散歩しています。
「おい、ナナエ。赤式と青式って争う宿命なんだよな？」
はい。そのように取り決められていますよ。
「じゃあ、なんでヤオとボンが？」
きっとあれですよ。殺し合いしたけど決着がつかなくて一緒に牛丼食べた帰りですよ。
「随分と具体的な推測だな……　なに？　あいつらの関係を知ってるわけ？」
いえいえ、知りません。私の具体的な推測に過ぎません。
「まー、なんと言うか……　あの二人、気にならないか？」
気になりません。二人は秘密の関係を構築中ですからそっとしておきましょう。
「いや、私の脳みそが二人を追えと発令中だから」
私は嫌ですよー。ヤオもボンも顔が怖いんですもん。名前と外見

が一致してませんもん。
「追跡決定。ナナエちゃんも強制参加で」
ヤンバルったら強引です。
しようがありません。
二人の後をつけましょうか。

2　ヤオとボンの奇妙な友情　＋　序文

序文２　ヤオとボンの仲について。
青式ヤオと赤式ボンは、敵対する二つの家に生まれた。
しかし、ヤオとボンは仲が良い。二人で三泊四日の京都旅行へ行くほどだ。
仲がよいといっても、もちろん喧嘩をすることもある。
青式と赤式だから、やっぱし殺し合いをする時もある。
だけど、二人はとても仲が良いのだ。

本編２　ヤオとボンの奇妙な友情。

早朝の市民公園。
青式ヤオと赤式ボンの二人は、缶コーヒー片手に今日の予定について話していた。
「ヤオくん。午後は山に行こう。山に行ってイノシシを食べよう」
「おお、なんというタイミングの良さだ。こんな事もあろうかと今日は鍋を持参してきた」
「流石ヤオくん。準備がいいね。まるで私の行動を先読みしているようだ」
「いやいや、偶然だよボンくん。貴方こそボクが鍋を持ってくるの事を知っていたかのようだ」
午後の予定が決まったところで二人は声高らかに笑いあった。
「さて午後の予定がイノシシ鍋だから、午前中の予定は新幹線に乗るのはどうだい？」
「最高だ。ついでに駅弁を買って二人で食べよう」
「それじゃあ今から切符を買いに駅に行こう」

「そうしよう」
二人はベンチから同時に立ち上がり、公園を出て行った。

＊

新幹線社内でヤオとボンは、イノシシについて語り合った。
「イノシシ狩りに行くのは初めてなのだが、ボンくんはイノシシ狩り経験者かい？」
「いや、私も初めてだ。お互い初めてなら作戦を練る必要があるようだ。ヤオくん、イノシシについて何か知識はあるかい？」
「イノシシ……　猪突猛進と言う言葉を知っている。この言葉から、イノシシはボク達に真っ直ぐ突っ込んでくるような気がする」
「なるほど。では私達はどうやってイノシシと対決しようか？」
「ボクは正面から叩けば良いと思うのだけど……」
「何故だい？　ヤオくん」
「イノシシの頭は前についていると聞いたことがあるんだ。その話が正しければ、突進してくる時は頭から来る。そのまま串刺しにすればいいのではないかな？」
「なるほど。ヤオくんのツラヌキなら一撃で串刺しだね」
「でもボクのツラヌキでは裂くことは出来ないから……　ボン君が首を落としてくれると助かるのだけど……」
「任せてくれ。ヤオくんがイノシシを串刺しにしたら、私のキリサキで首を落とせばいいのだね？　大丈夫。絶対に成功させてみせよう」

＊

駅から出て、ヤオとボンはタクシーで目的の山まで向かった。
山につくと、むせ返るような緑の香りが辺りには漂っている。ヤオとボンは山道を登り始める。
「ねえボンくん。イノシシは出てくるのかな？」
「どうだろうか。この山道を登っていたら永遠に会えないと思うが……」
「じゃあ、今ここで道を外れてみよう。道なき道を進むことでイノシシにもきっと遭遇できるよ」
「ふむ、それも一理ある。よし、ヤオくんの言う通り今から道を外れよう」
「よし来た。じゃあボクが先導するね」
「任せた」
二人は深く木々生い茂る奥へと進み始めた。

＊

道なき道を進むヤオとボン。しかしイノシシは一向に姿を現さない。
「ねえボンくん。イノシシいないね」
「そうだねヤオくん。でもきっと見つかるさ」
二人は奥へ奥へと進んでいった。

＊

道なき道を歩く事一時間。二人は未だイノシシと遭遇できなかった。

「ボンくん。ボクは少しだけ飽きてしまったよ」
「私もだヤオくん。お腹も空いてきた」
「ボク、予定変更を提案したいのだけど」
「どうぞどうぞ」
「ボク達は今、山にいる。山と言えば山の幸」
「つまりどういうことだいヤオくん。私にはよく理解できないのだが」
「ボン君。イノシシ狩りを中止して、キノコ狩りをしよう」
「おお、良い案だ。キノコなら先ほどから沢山目にしている」
「沢山キノコを集めて、お互いの家でキノコパーティーを催すなんて素晴らしい家族孝行だと思わない？」
「最高だよヤオくん。ヤンバルさんの喜ぶ顔が目に浮かぶぞ。早速集めよう」
二人は手当たり次第にキノコを集め始めた。

＊

キノコを持てる限り集めた二人は新幹線に乗って、三上坂町に戻った。
駅近くの牛丼屋に入って二人は特盛りを平らげ、ふらつく足取りで家路へ向かう。
「いやぁ、大量に取れたにヤオくん」
「そうだね、ボンくん。沢山取れたに」
「ヤンバルさんが喜ぶに」
「ナナエさまが喜ぶに」
「なんか楽しいにーねヤオくん」
「なんか楽しいにーねボンくん」
二人は焦点の合わない視線で見つめあい、声高らかに笑いあった。
「私とヤオくんは猫と犬の関係性に似ているに」

赤式ボンはそう言って、その場で跳ね始めた。
「そうだに。猫も犬も四本足。尻尾もあるし、鳴くにねボン君」
青式ヤオもその場で跳び始めた。
「だけど、鳴き声が違うに。それが赤式の私と青式のヤオくんの違いに」
そこでヤオが犬の鳴きまねを始めた。
ボンもすぐさま猫の鳴きまねを始める。
「ワンワンワン」
「にゃーにゃにゃ」
その鳴きまねが別れの言葉だったのか、二人は手を振って別れた。

3　ラリラリハッピーでキリングフィールド　＋　序文3

序文3

『私が二人いるというのは不思議なものである』

これはあくまで例え話である。

私は二人もいない。甲本スイカはこの世にただ一人。

だから、私の見た人物は幻覚であって、実際には存在しないのだ。

とりあえず、そう定義しておこう。

さて。

私は浜辺にいた。

焼けるような日差のなか、私は小さな海を作っていた。

格好をつけて言ってみたが、ようは砂遊びだ。穴を掘っているだけに過ぎない。

この歳になってまで砂遊びをするのはおかしな話だが、海を作る欲求には勝てない。

余談だが、「つくる」という言葉を漢字に書くと三種類ある。

小規模の「作る」

大規模の「造る」

そして新しく始めて生み出すことを「創る」と書く。

私は三番目の「創る」という漢字が嫌いだ。

私に新しい物を生み出すことが出来ないからだ。

ただの妬みだがね。

話を戻そう。

私は私だけの海を作っていた。すると海から上がってきた春姉がやって来た。

春姉は私の一つ上の姉だ。この時春姉は高校一年生。

春姉はジットリとした目で私を見て、カキ氷が食べたいと言った。

勝手に食べればいい。と私は思ったのだが、口には出さない。

もしそう言ったのなら、春姉はきっと泣いてしまう。泣き虫で甘

ったれだからだ。
春姉を泣かせると、雪姉がブチ切れるであろう。
雪姉は読書好きの静かで優しい人で、滅多な事では怒ることはない。逆に言えば、怒り狂うのは春姉に関連ことでだ。
雪姉が怒り狂う姿を見たくないので、私は作業を中断して春姉と共にカキ氷を食べに行く事にした。
そこから春姉の甘ったれが炸裂するのだが、その話はまた今度に。
春姉に振り回されて、ヘトヘトに疲れた私は海を作っていることを思い出して、急いで浜辺に戻った。
ここからが本題だ。
私の海は形を崩さず残っていた。
崩すどころか、私の完成イメージに近いものとなっていた。
そして、その小さな私だけの海に浸かっている奴がいた。
なんで私だけの海に私以外の人が入っているのだと考えた。
そいつをジッと眺め、気づいた。
そいつは私と同じ姿をしていたのだ。
髪型も顔も、身に着けた水着もお気に入りのブレスレットもまったく同じだった。
結局そいつが誰かは分からない。
もしかしたら私がそいつの事を忘れているだけなのかもしれないのだが。
しかし、私と同じ姿をした人を忘れる事があるだろうか？

本編３　ラリラリハッピーでキリングフィールド。

俺は正門でナナエ様の帰りを待っていた。
ナナエ様が赤式ヤンバルと会っていることは知っている。
二人の仲がよいことも知っている。

だからこそ、俺は心配だった。
信頼する相手に裏切られるのをナナエ様には経験して欲しくないからだ。
ナナエ様と赤式ヤンバルの関係はヤオと赤式ボンのようにはいかない。
ヤオと赤式ボンは二人が青式と赤式に分かれる前から親交があった。
ナナエ様と赤式ヤンバルの間には何もない。それどころか過去には何度もお互いを殺し合っている。
今のナナエ様はポヤンとしているから余計に心配になってしまう。
そして代替わりをしてもヤンバルは気の触れた女だ。いつナナエ様を手にかけようとするかわからない。
ああ、早くナナエ様の無事を確認したい！
「イチさーん。帰って来たによ？」
む？　ヤオか。どうしたその荷物は？
「キノコだに。ボンと狩って来たに」
そうかそうか。では今夜はキノコ鍋にでもするとしよう。
「そうだに。楽しみにしてるに」
んんん？　ヤオ、お前大丈夫か？　目玉がとろんとしてるぞ？
「大丈夫に。あ、そうだ。途中ナナエ様に会ったに。コンビニに寄ってから帰ってくるそうでに」
おお！　そうかそうか！　ならば直ぐに食事の準備をさせなくては！　ヤオは、キノコをククの厨房に持って行ってくれ。
「イチさんはどうするに？」
ナナエ様を待つ。

＊

青式ククはヤオから渡されたキノコの山を渡されて困惑した。

「ヤオくん……　これ食べられるのかな？　私キノコの知識ないよ？」
「食べられるに。ボク食べたに。安心三重丸だに」
「わかりました。私どうなっても知らないからねー」
青式ククは彼女専用の厨房でキノコをどう調理するか考え始めた。

＊

遅いぞ！　遅すぎる！
ナナエ様はどこのコンビニまで行っているのだ！
まさか！　何かあったのでは？
ああ、どうしようどうしよう……
困ったぞ……
もしナナエ様の身に何かあったら、赤式が攻めてくるに違いない！
大変だ大変だ……
これは困ったぞ……
「イチさーん。キノコ鍋できたに」
あ、ああ。わかった。直ぐ行く。

＊

俺は食卓についたと同時に左腕に痛みを感じた。
なんだと思って見てみると肘から先がなくなっていた。
足元に俺の左腕が落ちていた。
「なんで？　て、やべっ」
腕の断面から血飛沫。食卓が真っ赤に染まる。

俺は即座に左脇に右拳を挟み圧迫して止血を始める。
「誰だ？　赤式のどいつだ？」
俺は辺りを見渡して、ククがいることに気づいた。
「ククー！　大丈夫か！」
「大丈夫です。とっても大丈夫です」
「赤式はどこにいる！」
「どこにもいませんよぉぉぉん。うふ」
いないだと？　では誰が俺の腕を……？
切断系は赤式にはボンとタイムスだけ。タイムスは先日ナナエ様がミキサーして間もないから代替わりはまだしていないはず……
それとも別の系列が生まれたのか？　いや、そんなはずは……
「この場にはイチさんとわたしだけです。つまり、私がやったのん」
ククの手から水が溢れ出す。
あー、そういえばククも切断系だった。
「ククー！　お前は青式を裏切るのか！」
ククは甲高く笑って手の中の水を球体に形作り、回転をかけた。
「裏切り者は貴方です。フランダンスの戒律に背いたのは青式イチ。貴方なのです！」
フランダンスの戒律ってなんだよ？　と俺は突っ込んでやろうかと考えたら、ククが放った水球が目前に迫っていた。
しまった！
水球は形を崩し、薄い円盤となって俺の右肩を裂いた。
ヤバイ。非常にヤバイ。
俺、両腕使えない状態になっちゃったよ。
「ちょっとマジでフランダンスの戒律を教えろって！」
「いやよー」
ククは再び水球を作り出している。
俺はククの攻撃方法を知識だけで知っているのだが、現実の水球は思った以上にヤバイ。
仕組みはわかっているんだが……

「次二つ行きますよー」
ククは両手の水球に回転をかけ始める。
高速で回転する球体からの攻撃派生で俺が知るのは三つ。
一つ目が先ほどの円盤変化。スライサー。
二つ目が水球の回転軸から形状を直線に変化させて薙ぎ払う、ソード。
三つ目が回転水球をそのまま叩きつける。ボール。
どれも回転がキモだ。回転方向さえ分かれば、まだ避けることが出来るのだが……
どうやればわかるんだっつうの。
ククは水球を二つ放り投げる。
フワリとゆっくり空中に浮かびながら左右から水球が迫ってくる。
縦に回転しているのか？　それとも横か？
ソードか？　スライサーか？
ああ、分からん！
俺は水球から距離を取った。気休めにしかならないがやらないよりマシだ。
俺は水球がどう出るのか見ていなければならない。
あ。
水球二つで左右に分かれてるんだよね？
これは安全地帯なしの必殺って奴じゃないのか？
右も左もソードで横回転。片方は頭部を狙う。もう片方は足を狙う。
ソードの範囲は詳しく知らんが、想像するに二メートルぐらいだろうか？
おいおい……　ククー。お前強いじゃねぇか！
「イチさん何やってるに？」
食卓の扉を開けてヤオが入ってきた。
馬鹿野郎！　ヤオは入ってくるんじゃねぇ！
「えー、キノコ鍋食いたいに」

前見ろ前！　ククの水球が見えんのか！
「いや、それよりもキノコ鍋に」
ヤオは水球に構わず、食卓に座った。
おい！　何平然と食い始めてんだよ！
「キノコ鍋が美味しいからいけないに」
水球はヤオを無視してそのまま俺に近づいてくる。
ヤオ！　助けろって！　ククがイカレちまったんだぞ！
「それよりもキノコ鍋によ」
ヤオは俺ににっこりと笑った。
あー、もう知らねぇ。
二人とももう知らね。
俺が殺されるなら全員一緒に道連れにしてやらぁ！
イチ、ニイ、サン……
「イチくん？　何やっているのですか？」
食卓にナナエ様が入ってきた。
ナナエ様！　危険ですから下がってください。
「あら、良い香りですね？」
ちょ、ナナエ様！　危険です！
ナナエは水球を無視して食卓に着き、キノコ鍋を食べ始めた。
ちょっと待てよ！　なんでククは俺ばかり攻めるんだよ！
もういいよ！　ナナエ様もろともぶっ殺してやる！
「イチ君うるさいわよ？」
ナナエ様がそう言った時には水球は変化を始めた。
水球変化は俺が考えた通り、両方ともソードだった。
ソードで身体を切断される前に俺は、撃ち込んでやろうと思っていたんだが……
三つ目の水球が放られていたことに気づかなかった。
三つ目の水球は回転した状態で五つに分かれ、小さな円盤となって俺の身体を切り裂きながら貫通した。
それに虚を突かれて、そのままソードに足を落とされ首を落とさ

れ……

＊

「ヤンバルさーん！　キノコ鍋に食べるに」
「誰が食うか」
ヤンバルはボンの顔面を殴りつけて、キノコの詰まった紙バックを奪うと近くの民家に投げ込んだ。
ヤンバルはボンを苛めてやろうとそうしたのだが、結果的に赤式でキノコ騒動が起きる事を未然に防いだのである。

4　赤式ヤンバル　趣味は金属収集

序文４

「マジメの意味って知ってるかしら」
雪姉は私の部屋に入ってくるなりそう言った。
私はその時、『Ｒ＊Ｂ』の次の展開を考えていたのだが、雪姉の突然の訪問に中断を余儀なくされ、苛立ってしまう。
私は雪姉を帰らせる為に、真面目の意味について答えた。
私の「本気である事」という答えを聞いて雪姉は、満足そうに笑う。
「スイカちゃん。貴方の答えは間違いよ」
その答えに、ふざけるなと言ってやりたくなるのだが、そんな事を言ったら、雪姉が飽きるまで話に付き合わされてしまう。そういう訳で私は「じゃあ答えは何？」と訊くしかない。私の質問に、雪姉はこれまた満足げに笑って「真綿で首を絞めちゃうぞの略よ」と答えた。
「マジメ。それ即ち、真綿で首を絞めちゃうぞ。この言葉をスイカちゃんにプレゼントするわ。平凡な思考にちょっとしたスパイスを加えに来た私に感謝しなさい」
雪姉が感謝しろというのだから、私は感謝するしかない。だが私は言葉に出すつもりはない。ありがとうだなんて口にしたら気持ちが悪くなって吐いてしまうよ。
なんでマジメの意味を教えに来たの？　と私が訪ねると、雪姉は貴方の姉だからよと言った。
「私は貴方のお姉ちゃん。姉は妹を助ける。つまり私が貴方を助けるのは当然のことなのよ？　貴方の物語が楽しいものになるようにお姉ちゃんも祈ってるわ」

私って優しいお姉ちゃんでしょ？　と言って雪姉は部屋を出て行った。
私は雪姉に優しくされたことを認識した。
私は雪姉が物語を書いた事を知っている。当時付き合っていた彼氏と一緒に物語について話しているのを見たことがあったからだ。それにこの家では物語を必ず一つ書かなくてはいけないという決まりがある。
だから私が書いているのを知って、雪姉なりにアドバイスをくれたのだろう。
雪姉が見ているのは春姉だけじゃない。ちゃんと私のことも見てくれていたのだ。
なんか、あったかいなぁ。
さて、この話に元ネタがあるのか私自身わからない。もしかしたら雪姉という人物は私の妄想かもしれない。
まあ、妄想の一言で片付けられたら楽だから、私はそう言ってしまうのかもしれない。
とりあえず、楽になりたいので言います。
これは私の妄想です。
さあて、言いたいことも書けたので、序文を一回締めることにする。
次は「R＊B」を書きます。これはホントに元ネタありますから……　ね？

本編　赤式ヤンバル。趣味は金属収集。

「とある古本の町に金属で作られた物しか扱わない雑貨屋がある」
青式ナナエはそう言ってその店のチラシをヤンバルに渡した。
ナナエから受け取ったチラシには『三上坂金属雑貨店』と書かれていて、その店名にヤンバルの全身は粟立った。この店の人と金属

について語りたい欲求に駆られたのだ。
「ヤンバルさんは金属収集が趣味と聞いたので、そのお店、気に入ると思う」
金属収集を趣味としているヤンバルは今すぐにでも行きたくなった。その事をナナエに伝えると、是非言ってらっしゃいなと言ってにっこり笑った。
「今度会うときにお店の感想聞かせてね。あ、あとお土産もお願いよ」
申し訳ない。とヤンバルは言ってナナエと別れた。
ヤンバルはすぐに三上坂町駅から電車に乗り、ナナエの言う古本の町に向かった。
電車に揺られながら、その店にはどんな形の金属があるのだろうと想像してヤンバルの胸は高鳴った。

＊

三上坂金属雑貨店の看板を見つけて、ヤンバルは店内に入った。
店に入ってヤンバルが思ったことは、意外におしゃれな店だということだった。
シンプルで、尚且つ無機質。剥き出しのコンクリートの壁に、酷く錆びついた壁掛け時計。どれもヤンバルの好みであった。
ヤンバルは早速何かよい雰囲気を持つ金属はないかと探し始めた。まず目に付いたのは、テーブルの上に盛られていた古めかしい沢山のペンダントトップだ。
ヤンバルは一つ一つ手にとって眺め、気に入ったものを金属トレイに入れる。
ペンダントトップをトレイに乗せたとき、カチャリと心地よい音がなった。その音にヤンバルは恍惚な表情を浮かべる。
他にも何かないか？　とヤンバルが店内をうろついていると、店主がいないことに気づいた。

どこに行っているのだろうかと、ヤンバルは考えたのだが、それよりも目の前に広がる金属の中に、素晴しい風格の物はないだろうかと探し始めた。
ヤンバルは金属で出来た物の中でも、アンティークに分類されるものに目がない。
それは自分が生まれるよりも昔から存在して、私の目の前に現れるまでにどれだけの人の手に渡り、ここまで来たという事実がヤンバルを金属の虜にさせてしまうのだ。
目の前に広がるのは数々の歴史を持ち、沢山の思い出を持つ物たち。
ヤンバルは長い時間この世界に存在しているこれらの金属が大好きなのだ。
ヤンバルはその後も、自分の審美眼を基準に数点選び、店主不在のレジに向かった。
レジに商品を置いて、店主はどこに行ったのだろうかと再び考えた。
その時、レジから先にある物に驚いてヤンバルは声を上げてしまう。
そこには、沢山のガラクタに埋もれるようして男が寝息を立てていたのだ。
「お、おい。大丈夫か？」
ガラクタに埋もれた男にヤンバルは声を掛けた。だが、穏やかな寝息が帰ってくるだけだった。
ヤンバルは男を起こすのも悪いなと思ったのだが、起こさないと見つけた物を買う事が出来ないぞと考え直し、男の上に乗っかったガラクタを退かす。
「あー、起きろ」
頬を軽く叩いて声を掛けると、男はゆっくりと目を開けた。
「優子ちゃーん……　悪いんだけどもうちょい寝かしてよー　何かすごく眠いんだよー」

ヤンバルは私は優子ではないのだが、と言うと、男はバッと身を起こしてヤンバルをしばし見る。
「あ、失礼しました……　あはは……　今日は何かとろける様な時間の流れだったもので……」
男は頭をボリボリと掻いて、情けない声で笑った。
「いやぁ……　ホントすいません。で……」
ご用件はなんでしょうか？　と男が言った。間の抜けた男だなとヤンバルは感じながらも、会計をお願いします。と言った。男が立ち上がり、レジに向かっていった。
「珍しいですねぇ……　こんな店にお客さんが来るなんて」
レジ打ちしながら男はヘラヘラ笑ってそう言った。
「しかも美人さんが来るなんて明日はやりでも降るんですかねぇ？」
知るかそんな事とヤンバルは思いながらも、美人と称されたことを内心喜んでいた。
「お姉さん、金属好きなの？」
レジを打ち終え、金額を提示した後、男はそうヤンバルに尋ねた。
ヤンバルは好きですよ。と答えて金額ぴったり出した。
「金属はいいですよねぇ……　ボクは鉄が錆びついていくところが、もうなんともいえないほど好きなんですよ」
面倒くさい奴だとヤンバルは思っていたのだが、男が語る金属愛を語り始めて、もしかしたらこいつと気が合うかもしれないなぁ。と思った。
「お姉さんもなかなかの金属好きだと思うんだけど、今度一緒にお食事でもしません？　もちろん金属について熱く語るためですけど。どうです？」
ヤンバルは少し迷ったのだが、自分以外の金属好きと話をするのも楽しいかもしれないと考え、いいぞ。と答えた。
「ボクは三上坂英司。お姉さんは？」
「赤式ヤンバルだ。というか私はお姉さんと呼ばれるほど歳食っちゃねぇよ」

「あ、ごめんなさい。ボク、綺麗な人をお姉さんって呼んでしまう癖がありまして。というか赤式さんはどう見てもお姉さんでしょう？」
「どこを見てそうなるのかさっぱりわからんのだが……」
「その冷たい眼つきは、僕の中でお姉さんなんですよ。と言うわけで今から赤式姉さんと呼びますねぇ」
馴れ馴れしい男だとヤンバルは思ってため息をついた。そのため息を聞いて三上坂は美人のため息ってエロスを感じませんか？　とヤンバルに言った。
ヤンバルは面倒くさくなって店を出ることにした。
「また来て下さいね」
ヤンバルはそう声を掛けられたのだが、無視して外に出た。
店から出て、駅に向かう途中、ヤンバルは三上坂英司という男について考えた。
馴れ馴れしくて、馬鹿そうな顔の男。
嫌いなタイプの男だ。とヤンバルは考えながらも、どこか憎めない奴だとも思った。
また今度行ってやるか。
そうヤンバルは思った時、ナナエのお土産を買うのを忘れていたことに気づいた。

5　赤式サヤの自転車日記（8／27～9／5）　＋　序文（前書き）

誤字訂正。

5　赤式サヤの自転車日記（8／27～9／5）　＋　序文

序文

突然だが、私の家族について書いてみようと思う。
わたくし、甲本スイカには二人の姉がいる。
一番上が白田雪絵。その次が臼井春香。三女が私だ。
姉妹なのに苗字が違うのには、父が深く関係しているとだけ言っておこう。ヒントは全国展開。ヒントになってない気もするが、想像力をフル回転させれば解けない問題ではない。と思う。
さて二人の姉についてだ。まずは長女の白田雪絵から。
長女の雪絵は、時間があれば本を読んでいる。読んでいない時は寝ている間だけと言っても過言ではない。もしかしたら夢の中でも本を読んでいるのかもしれない。とにかく彼女は読書好きである。
彼女の読む本は、小説の類から、学校で使う教科書、雑誌と、読み物であれば何でも読む。俗に言う雑食系読書家である。
彼女が本を読む理由について、少し前に尋ねたところ、読むのが好きなだけよ。と言っていた。
本について何を思うのかと尋ねれば、彼女は流れるような文章があれば何でもいいわ。答えた。
彼女曰く、流れるような文章を読むと自分を忘れてしまうとのこと。
結論から言ってしまえば、彼女はどんなに酷い物語でも、美しい文章があればそれで良いらしい。
次は次女の春香。
春香のことを考えて、まず思いつくイメージは、沼地である。
表面上は、そんな雰囲気を感じさせる事はない。初対面なら私達の中で一番印象が良いであろう。しかし、先ほども書いたとおり、春香は沼地のような人である。

沼地とイメージしてしまうのは、きっと彼女の部屋にある沢山のサイコロのせいであろう。サイコロを見て、私は呪術的なイメージを連想してしまうせいであろう。

彼女はサイコロとして機能するのならばどんな形のものでも集める。一般的な六面体から、十二面体、二十面体と様々な形のサイコロを所有しており、専用の棚まで作って飾っているのである。一番のお気に入りは、骨で作られたサイコロだと彼女は言っていた。

ある時、私が何故集めるのかを尋ねたら、そこにサイコロがあるから。と言った。その時、彼女はサイコロを作っていた気がする。

何故サイコロが好きなのか私が尋ねると、振ればわかるよ。と言って笑っていた。

思い通りにならないから私はサイコロが好きなの。と臼井春香は言っていた。

さてさて。

私が何故こんな話を書いているのかといえば、二人の姉を語ることによって私自身の毒を薄めようとしているのである。

毒と言っても、実際、大したことではない。二人の姉に比べれば小さな趣味である。

さて、長女は文章を読むのが趣味である。流れるような文章があれば彼女はどこでも生きて行けるだろう。次女はサイコロをがあれば、馬鹿みたいに何時間も振り続けるであろう。

さて三女のスイカは何があれば生きていけるのか？

答えは、私以外の誰かだ。

本編　赤式サヤの自転車日記。８／２７　～　９／５

八月二十七日金曜日。

今日から私は日記を書くことになった。ヤンバルさんに自転車の試運転を頼まれたからだ。

日記を書くなんて初めてなので、何を書いてよいのかわからない。どうしたものやら……

とりあえず、今日あったことを書くことにする。

よし。書くぞ！

ボンがヤオさんと建設途中のビルを見に行ったと聞いたので、今日は自転車日和。悔しいので私も見に行く事にした。一人でだが……

ああ、ヤオさんとお出かけするボンが羨ましい妬ましい。私もヤオさんとお出かけしたいよホント。だが、この暗い感情がなければヤンバル印の自転車を動かす事が出来なかったかもしれないのでよしとする。

ヤンバルさんが作った自転車は無駄にペダルが重い。ギヤ比とか考えて作っているのだろうか？　ド素人の私が言うのも変だけど、これはないですよ。重すぎ。坂上るの辛すぎ。死ぬかと思った。

結局、ボンとヤオさんが見たという建設途中のビルは見つからなかった。考えてみれば、そういうのは街に沢山ある。思いつきで行動したことに後悔。次はちゃんと場所を聞いておこう。

書くことが……　ないぞ。

しょうがないので、今日はこのぐらいにしておく。

現在時刻午前一時三十分。

以上。

八月二十八日土曜日。

ボンがまたヤオさんとお出かけをしたらしい。だから今日も自転車日和。

ヤンバルさんが自転車に沢山乗って日記を書けば、ヤンバルポイントをくれると言っていたので、頑張って続けます。目指せ五万ポイント！

二人が行って来たという、市民公園へ出発！　今回は大成功でした。ちゃんと場所も調べておいたので。

というかこの自転車どうしようもない。こんなの乗ってたら足に

筋肉つきすぎてしまう。ああ、明日ヤンバルさんに言わないと。
市民公園には鳩に餌をやる老人がいました。他には子供とか？
帰り道、ゲーセンに寄る。対人戦でボコボコにされた。ああ、ムカつく。次は絶対勝ってやる。
日記を書き始めて気づいたことが一つ。
私の一日が薄っぺらいポテトチップスのようだということ。
反省。
現在時刻午前二時十分。
以上。

九月一日水曜日。
ヤンバルさんが問題点を改善したと言っていたので、久しぶりに自転車日和。
乗ってみた感想はやはり重い。どこを改善したのかまったくわからない。ヤンバルさんはこの自転車に乗ったことがあるのだろうか？
ボンはヤオさんと会わなかったようなので、目的地に迷ったが、青式家の前まで行く事にした。
青式家は家から片道六キロ。ヤンバル自転車のせいもあってか疲れた。このくらいで疲れてしまう私は体力があまりないのだろうか？
青式家の屋敷は、思った以上に大きかった。あれだけの人数がいるのだから当たり前なのだけど、うちだって同じぐらいいる。なのになんでうちの家はボロっちいのだ！　明日、エコーに相談してみよう。もしかしたら何とかしてくれるかもしれない。
現在時刻一時十六分。
以上。

九月二日木曜日。
ヤンバルさんに自転車のことを話したら、殴られた。あの細い腕のどこにそんなパワーがあるのか謎である。燃やされないだけマシだったが、死ぬかと思った。

ヤンバルさんに殴られた後、エコーに湿布貰った。相変わらずエコーは優しい。ヤオさんの次ぐらいに。
ヤンバルさんのことをエコーに訊くと、あの人は工作馬鹿だからと笑っていた。確かにあの自転車をマトモに扱えるのはヤンバルさんぐらいだろう。
しかし、なんでヤンバルさんは自転車を作っているのだろうか？
最近妙にソワソワしているように見える。何かあるのだろうか？
明日訊いてみよう。殴られるのはイヤだけど。
あ、今日は青式を一人倒しました。やったー。名前は確か……
ククだったかな？　青式ナナエもあんぐらい弱ければいいなぁ……
そういえば、うちがボロいのは先代のヤンバルさんのせいらしいです。先代は怒ると物を燃やしたくなる癖があったとか……　ヤンバルの名は伊達じゃありません。
現在時刻午後十時四十五分。
エコーの特訓を受けてから寝ます。
以上。

九月三日金曜日。
ヤンバルさんが口をきいてくれない。昨日のことが原因だろうと思った。なんとか機嫌をとらないと、燃やされてしまうかもしれない。家とか私とか。やばいぞ。
何かよい手はないだろうか？　素直に謝るべきだろうか？　でも、駄目なものは駄目だというべきでは……
ヤンバルさんが喜びそうなもの……
あの人の趣味とか知らないし……　困りました。エコーに相談するしかありません。明日、起きたらすぐに訊きに行きましょう。
今日はゲーセンに行って、この前の恨みを晴らしてきました。相手は違うけど、ボコボコに出来るのは楽しいものです。百円でそこそこ粘れたので、今日は相手に恵まれました。とりあえず感謝。誰に感謝すればいいのかわかりませんが。

眠い。もう寝る！
現在時刻午前二時二十五分。
以上！

九月四日土曜日。
朝、エコーにヤンバルさんは金属が好きだと教えてもらったので、隣町まで自転車の部品と工具を見に行きました。見に行ったのだけど、どれを買えばいいのかわからなかったので、ボルトと言うものを買って帰りました。
ヤンバルさんにボルトを献上した結果、素晴しいと褒められました。気に入ってもらえたようなのでよかったです。
ヤンバルさんが自転車を作っている理由は、どうやら誰かにプレゼントするようです。それで私に試運転させていたとヤンバルさんは言っていました。誰にプレゼントするのか訊いたら、殴られました。今も痛くて死にそうです。エコーはお出かけ中なので自分で湿布を探しました。
痛すぎて眠れそうにありません……
現在時刻午前三時五十八分。
以上。

九月五日日曜日。
痛い。凄く痛い。ヤンバルさんに殴られたところが痛い。
痛くて死にそうです。というか死ぬかも。
なんか良い言葉を残したくなったので考えてみる。
死なない練習をしてみようか。
うん。エコーが来たら言ってみよう。
現在午後八時ジャスト。
以上。

6　抵抗＊息　彼女が壊したものについて。　＋序文6

序文6

「この物語のテーマは、赤と青の戦いであーる。しかし両者が対立する場面は皆無であーる」

私の部屋で『R＊B』を読んだ雪姉は頭を左右に揺らしながらそう言った。

「この物語には圧倒される何かがなーい。読んでいて、とてもつまらなーい」

頭を右に大きく振って、その勢いで椅子から立ち上がり、体を回転させて本棚の物色を始めた。

「良くも悪くも平凡な物語。スイカちゃんにはもっと奇妙なものを書いてもらいたいなぁ」

そこで雪姉は首を鳴らす。

「私は奇妙なお話大好きよぉ？　あ、折角だからお手本を見せましょうか？」

雪姉がそう言ったので私は頷く。

「六話目は私が書きます。スイカちゃんは指を咥えて見ていなさい」

そういう経緯で、今回の『R＊B』は雪姉が書くことになった。

雪姉はこの物語をどう転がしていくのだろうか？

本編　抵抗＊息　彼女が壊したものについて。

青式家の者は液体を操る。それが青式家の能力である。

液体を操ることが秀でた青式家だが、自由自在に操るものは未だいない。切断、貫通、操作の三つを兼ね備え、最も完璧だと謳われ

るククの名を持つ者でさえ完全に操るとは不可能だった。
誰もがククを最も完璧に近い青式と呼ぶであろう。だがククが当主の座につく事はない。
当主を代々継ぐのは、ナナエの名を持つ者だけだから。
青式ナナエ。その名は青式の中でも劣悪な能力者に与えられるもので、最も不完全な者の為の名である。
ククの力が青式の歴史の終点であるのならば、ナナエの力は青式の歴史の始点である。ナナエの能力は最も原始的なもので、液体を操る事もままならない。劣悪と呼ばれるのも、成長する事のないナナエの能力ゆえである。
青式ナナエは触れたものを液体に変える力を持つ。
磨く事すら出来ない劣悪な能力で、単純明快。それゆえにナナエは青式の当主を継ぐものである。
ここから少し昔の話をしよう。
私が赤式になったばかりの頃の話。そして青式ナナエと初めて対峙した時の話だ。

＊

私はサヤ先輩と三上坂町駅前のデパートで買い物をした。正式な赤式として認められた私は、屋敷で暮らすことになったからだ。
買い物を済ませてデパートから出ると、暗い青に染まり始めたよ。とサヤ先輩が言った。何のことですか？　と尋ねると、サヤ先輩は空を指差して、やっぱし青は強いねぇ。と呟いた。
その時の私はヤンバルの名を受け継いだばかりで恐いものなどなかった。だからサヤ先輩の言う『青は強い』という言葉の意味が解らず、青が強いように見えない。と私は言った。
「なんでそう思うの？」
サヤ先輩はそう言って小さく笑う。イタズラを思いついた少年の様な笑みだった。

「青は死人の色。だから燃えるような赤に敵うはずがないのです。死を燃やすのはいつも赤ですから」
私がそう言うと、サヤ先輩は何か納得したように頷いて、貴方がヤンバルになった理由がわかったわ。と言った。
「死を燃やすのは赤いもの。貴方の言うとおり。赤は力に満ちた色だと私も思う。でも、青はとても強いものよ」
サヤ先輩は私の頬を撫でながらそう言った。
「赤は生きる者の色。太陽の赤。血の赤……　赤から連想されるものはどれも力に満ち溢れている。だけど生きる者はいずれ死ぬ。体から赤色が抜けて、この空のように青くなるの。始まれば終わる。赤から青に」
サヤ先輩は目を閉じて、貴方なら青式ナナエを倒せるかもしれない。と言った。
「夜の青さをもっと知る事。貴方にはそれが必要」
サヤ先輩は、私の頬から手を離し、見てごらん。と言った。
見てみると、サヤ先輩の手の平はまるで火傷を負ったように爛れていた。
その理由は未だわからない。

＊

多くの赤式が青式ナナエと戦い、敗れ、無残な姿に変えられてしまった。
エコーさんにボンさん。同じ時期に赤式となったタイムス。そして様々な事を教えてくれたサヤ先輩。みんな、ビーフシチューのようなドロリとした液体に変えられてしまった。
死んでも、代替わりをしてみんな帰ってくる。だから悲しむ必要はないのだ。と私は自分に強く言い聞かせた。
みんな帰ってくるから大丈夫。エコーもボンもタイムスもサヤも、

みんな帰ってくる。
そう思うことで、私の中で青が拡がるのを抑え、その虚栄を無理にでも青式を燃やし尽くす原動力に変える。
動けるうちに青を燃やし尽くす。
二度と動けなくなる前に、青式ナナエを殺す。
そう心に誓った後から青式ナナエと対峙するまでの記憶がなくなっている。左手の中指薬指小指が誰に奪われたのかすら思い出せない。左足首から先を誰に奪われたのかわからない。なんとなく沢山の青式を殺したのだろうと感じるだけで青式ナナエに「醜い姿」と笑われるまで気付かなかった。おかしく思うかもしれないが本当の事だ。
青式ナナエは甲高い声で私を笑ってから、表情を消して「まだ失いたいものがあるの？」と言って首を傾げる。
私は、何か言葉を叫びながら走った。バランスを崩しそうになりながらも全力で走った。
青式ナナエは「ならば沢山消してあげましょう」と言って笑った。
私は青式ナナエを根本から消し去りたかった。ナナエの言動、動作全てが気に入らなかった。
何よりも、サヤ先輩を殺したこの女が許せなかったのだ。
私の中の赤を燃焼させる。燃えはじめた赤を右手に集約する。一撃で青式ナナエを殺す為に。
だが、私が殴るよりも先に、ナナエは地面を液化させた。私は足を取られ倒れた。液化した地面に私の体はズブズブと沈んでいく。
「貴方の体をこれ以上奪ったらかわいそうだわ。だってこれ以上醜くなったら誰も貴方を正視できなくなってしまうもの。かわいそうな人。あ、他の赤式も貴方と同じようにすればいいのね？　貴方と同じように醜ければ笑えないものね。みんな仲良くニコニコ暮らせるわ。どうかしら？　良い案だと思わない？　死ねば貴方たちは代替わりをして私の前にまた来る。だから殺さずに動けなくするの。何か別の要因で代替わりしたのならすぐに両手両足奪って動けなく

すればいい。面倒だけど、それもいつか習慣の一つになるし、きっと私も続けられるだろうし、私一人でも十分出来る。あ、またいいアイデアが閃いた。青式の連中もそうすればいいのよ。赤式も青式もみんな私が管理するの。そうすれば誰からも文句を言わなくなるものね」

ペラペラと青式ナナエは長い事語った後、一度甲高く笑った。

「私、貴方を好きになったわ。貴方がいなかったら、こんなに素敵なアイデア生まれなかったもの。だから好きになった」

そう言って後、表情を消したナナエは踵を返す。

私は逃げるのかと叫んだ。

「貴方の醜さに吐き気を堪えるので必死なの。だから今日はサヨウナラ」

それが青式ナナエと初めて対峙した時の話である。

私はその後、青式ナナエが赤式家を潰しに来るのではないかと長い事屋敷で待ち構えていたのだが、来る事は一度もなかった。

多分来ないだろうと思った瞬間、どっと疲れた。

私の元に代替りをしたばかりのサヤが来て、少しお休みくださいと言った。

サヤに私は手を引かれ、寝室へと戻った。

寝室に戻ってもサヤは手を放さなかった。その手は小さく震えていた。

そこで私が、赤式の最年長者ということを思い出した。私がいなくなれば、この小さな赤式たちは途方にくれてしまうだろう。

そこで私はサヤ先輩の言った『夜の青さを貴方は知るべき』という言葉の意味が少しだけ解った。

その事が解って思うのは、そう簡単に死ぬわけにはいかない。もし死ぬのならば、私の持つ全てを渡してから死ぬのだと。

「ヤンバル様、無理をしては駄目です！」

サヤの言葉に私は頷くと、サヤは安心したようでニッコリと笑った。

「一人で青式を倒しにいくなんて事もうしないで下さいね！　もし戦いくのなら私たち赤式全員ご一緒しますから！」

目の前のサヤは無邪気な笑顔でそう言った。

そこで私は泣いてしまった。私の良く知るサヤ先輩は二度と帰ってこないのだと気付いてしまって。

7　ゲームセンターにて。ナナエサイド＆ヤオサイド　＋序文７（前書き）

崩壊中。

7　ゲームセンターにて。ナナエサイド＆ヤオサイド　＋序文7

序文7

雪姉が書いた六話目を読んで、私はこの物語の流れを少し掴んだ。第三者に物語を託し、この先の流れを掴むのもどうかと思う。だがそうする以外この状況を打開する策が思いつかなかった。

しかしながら、さすが雪姉である。壊すのが好きだと言うだけあって、見事に流れを作り出した。本当に感謝である。

さて、流れが掴めたのなら、次に私がすべき事は単純明快。流れを見失う前に書くだけだ。呼吸をするように指を動かし、ツラツラと書き綴ればいい。非常に簡単な事である。

そう。非常に簡単なことなのだ。

しかしながら、私の思い描くように指は動き出そうとしない。簡単だと思ってもなかなか上手くいかない。これが私の実情である。

なんとかして、指が動き出すのを待っているわけだが、なかなか動かない。私の思考と指の間に何かノイズが発生しているのだろうか？　書いては消して、書いては消してを繰り返している。こうしている間にも私は流れを見失いそうになっているのに困ったものだ。

この指を何とかしなければ、私は雪姉が生んだ流れを無駄にしてしまう。

指が動き出す方法を考えて、思いついた先から試していくがなかなか上手くいかない。雪姉ならきっと指を躍らせる為のよい方法を知っているのだろうが、残念な事に雪姉は外出中。いつ帰ってくるのかわからないので待つわけにもいかない。

雪姉以外にこういう物語の相談ができるのは春姉だけなのだが、出来る限り春姉と接触したくない。相談を持ちかければ、彼女が納得する結論が出るまで話が終わらなくなる。

しかしながら、こうしている間にも私の見た流れは消えつつあっ

て、そんなわがままを言っていられる程の余裕は私にはない。
ああ、こうして悩んでいる間にも頭から物語の流れが零れ落ちていく。流れを見失えば指を動かす方法どころではない。時間だけが過ぎていき、私は置いてきぼりだ。
しようがない。春姉に相談しよう。
私は意を決して春姉に指の躍らせ方について尋ねる事にした。
春姉のご機嫌を損ねてしまった時の為に、先日こんな事もあろうかと購入しておいたサイコロを引き出しから取り出して私は部屋を出る。春姉の部屋に向かって長い廊下を進む。
春姉の部屋の扉の前に立ち、深呼吸。
よし。いくぞ。
扉をノックする。と同時に扉は開いた。扉を開けたのはもちろん春姉である。
「スイカの足音が聞こえてきたから、もしやと思ったの。だから待ち伏せしてみましたぁ。そしてその予想は的中！　面白いぐらいにドンピシャリ！」
春姉はそう言ってニッコリ笑った。私もつられて笑う。
私は春姉にシャツの襟元を掴まれ、部屋の中へと引きずり込まれた。
私は春姉に放り投げるようにベットに座らせられた。そのあと春姉は勢いよく私の隣に着席。ベットが軋んで音を立てる。
「何か困ったことがあるのですね？　そうでしょうそうでしょう。そうでもなければスイカは私の部屋にくることないですからねぇ。悩み事はなんですか？　恋の悩みですか？　それとも身体的な悩みかな？　今ならどーんとお答えしますよぉ？」
春姉のテンションが異様に高い。これは良くない兆候である。しかしながら黙っていると機嫌を損ねてしまうので私は指を動かす方法をさっさと尋ねる事にする。
指を上手く動かすにはどうしたらいいのかと、春姉に訪ねると「そんなことか」と呟いた。

「書きたい事を書いていけばいいじゃないの。書くのが楽しいならそれが一番でしょうに」
それが出来ないから困っていると私が言うと、春姉は「思いついたことから書けばぁ？」と言った。
「私は思ったことをすぐ書いてた。勢いを殺さないように書きまくった。えーと、言葉で言うのが面倒だなぁ……　書いたお話を見て貰った方が早いと思う」
そう言って春姉はベットから立ち上がり、サイコロが飾られた棚の一番下の引き出し、雑誌やらルーズリーフが詰め込んである所から半透明の書類ケースを取り出した。
「この中にあのお話とかメモとか全部入っているから適当に見て参考にしてねぇ」
春姉から書類ケースを受け取り、ありがとうとお礼を言った。
「あらあら、スイカがお礼を言うなんて珍しい。これは何か良くないことが起きるぞぉ！」
そう言って、春姉はクスクスと笑う。
「これでも私はお姉ちゃんなんだからねぇ？　侮ってもらっちゃ困っちゃいますよ？」

本編7　ゲームセンターにて。ナナエサイド。

私は今、ゲームセンターという所に来ています。
ヤオくんに気晴らしにお出かけしましょうと誘ってくれたからです。
何に対しての気晴らしなのか私にはわかりませんでしたが、ヤオくんのお誘いを断る理由もなかったので今こうしてゲームセンター

に来た訳です。
ゲームセンターの中では、沢山の音が混ざり合って不思議なメロディーを奏でていて、ピカピカと眩しく光る画面が沢山並び、その画面の前に割り当てられたように人がお行儀良く座っています。
とても不思議な場所です。この雰囲気はヤンバルと親和性が高いように思えます。今度誘ってみましょう。
さて、ここで私は一体何をすればいいのでしょうか？　そもそもゲームセンターとは何をする場所なのか私は知りません。さっぱりです。
私は持てる知識をフル動員してゲームセンターについて考えましたが、よくわかりません。しかしそこで諦めては青式ナナエの名が廃ります。もう一度良く考えましょう。
キーワードはゲームセンター。名は体を表すという言葉から連想するに、ここはゲームのセンターなのがわかります。ゲームとは遊戯。センターは中央、もしくは設備。なるほどなるほど……
ここは中央遊戯設備場。洒落っ気を出してゲームセンター呼んでいるのでしょう。わかりますわかります。私に解けない問題などないのです。
中央遊戯設備場。この名前が指し示す意味は、誰でも気軽に賭け事が出来る管理されたクリーンな施設。つまりはゲームセンターとは国の経営する賭博場で、私の様な小心者でも安心かつ安全に賭け事を楽しませてくれる場所ということ。
わかりました。それならば私のやるべきことは一つ。私もここで楽しめばいいのです。
さあヤオくん。お勧めの賭けを教えてください。青式家当主の名に相応しい華やかでダーティーな賭けを教えなさい。
「お勧めと言ったらあれですよ。ガンシューティングですよ」
ほう。ガンシューティングとはなんと珍妙な名称……　その賭けのコツはなんですか？
「とにかく撃つ。死ぬ前に撃つのです」

ガンシューティングとは命を賭けるのですか。命を賭けて手に入るのは一体なんなのです？
「達成感です」
命を賭けても手に入るのは達成感だけ……　決めました。その賭けをやります。
私はヤオくんに場所をガンシューティングをやる場所を教えてもらい、すぐに向かうことにしました。ヤオくんは「案内します」と言ったのですがもちろん私は拒否します。これから命を賭けると言うのに付き添いがいては格好よくないですから。
「わかりました。ではこれを渡しておきます」
ヤオくんから百円玉を五枚渡されました。よくわからないのですが、初期費用としてお金が必要なのでしょう。
「これがなくなったら終わりです。ボクはこの階にいるので死んだら帰ってきてください」
大丈夫です。絶対に生きて帰ります。死ぬつもりはありません。
「最後に一つだけ。やる前にルールを熟読し、しっかりと頭にいれて下さい」
わかりました。お互い死なないように頑張りましょう。ちなみにヤオくんはどんな賭け事を？
「格闘物です」
そんな物騒な賭け事まであるのですか。ゲームセンター侮り難し。

＊　ゲームセンターにて。ヤオサイド。

階段を上っていくナナエ様を見送ってから、ボクは格ゲーフロアに向かった。
いつもと違う時間帯に来たからか、フロアには知らない顔ばかりで、少しだけ緊張してしまう。いつになったらこの空気になれることができるのだろうか？　と考えながら、いつもの筐体に座って深

呼吸。
さて、今日はどれだけ時間を潰せるだろうか？
いつものキャラを選択。ボンくんによく似た渋めの男性である。ボンくん二号である。
一面開始の合図と共に、ボクはボンくん二号を突撃させる。
ボンと会えない日はこうして格ゲーに興じるのが日課となってしまった。ボンくん二号との付き合いもそこそこ長くなりつつある。
ボクは一面をクリアする。二号の動かし方はそれなりにわかってきたから当然といえば当然。
二面開始。ボクは二号を突っ込ませる。さすがボンくんに似ているだけあって二号はタフな男だ。
二号のようにボンくんを操れたらと思ってしまう。ボクの意のままにボンくんが動いてくれれば、きっと喧嘩してしまう事もなくなるだろうに。
しかし、ボンくんがボクの意のままに動いたらボクは彼を嫌いになってしまうだろう。ボクの思うように動くボンくんはボンくんじゃない。
そんなボンくんは二号だけで十分だ。
二面をクリアして、三面が始まろうとした時、乱入が入った。キャラクター選択画面へ切り替わり、相手が動かすカーソルを追う。それを眺めながらボクと二号のコンビで勝てるだろうかと思った。二号はボンくんによく似ているけど、ボンくんではない。
よって、勝てないかもしれないと思ってしまう。
従順なボンくん二号は、ボクが状況判断を間違えても意見することなく、怒る事もない。ボクの命令通りに動くだけだ。ボンくんのように叱ってくれる事は絶対にない。
相手がキャラ選択を決め、対人戦が始まった。
二号のことをボクはあまり好きではないが、ボンとよく似た姿の彼が負けるところを見たくない。殴られるのだってできる限り見たくない。

見たいのはボンくんのような二号の姿だ。
殴られることなく、相手を燃やす姿。
相手の意表を突き、混乱させて笑う姿。
それがボクの好きなボンくんの姿だ。
そんな事を考えていたら、いつの間にか終わっていた。
画面に立っているのは二号。
しかしライフを半分削られた二号はボンくんに程遠い。
ああ、こんなの負けも同然だ。もっと二号をボンくんのように動かせられたら……
その後もボクと二号は負けることなく相手を倒し、コンピューター戦に戻った。
乱入される事なく、最後のボスを倒し、ゲームは終了する。
席を立ち、もう一度やろうかと思ったのだが、やめにした。ナナエ様の姿を見つけたからだ。
ボクはナナエ様に声を掛け、ガンシューティングの感想を尋ねた。
「負けたのに命を取られることはありませんでした……」
と、ナナエ様は眉を八の字にして言った。
屈辱です。と言って悲しそうな顔をしたナナエ様を見て、ならばもう一度やりましょう。と誘った。
ナナエ様は負けるのは嫌ですと言ったのを、ボクは大丈夫ですと返す。
何故ですかと尋ねられて、僕は得意だからと答える。
ナナエ様は納得できないと言いたげな顔つき。何とか安心させたいと思うのだが、ボンくんによく似たキャラが登場するのは一通り大丈夫。とは口が裂けても言えないボクであった。

8　戦う理由としばしの別れ　＋　序文（前書き）

回収開始

8　戦う理由としばしの別れ　＋　序文

断片2

お話の流れを確定させる。

理由は甲本スイカの形が見えてきたのと、いつになっても先へ進まないR＊Bにスパイスを加える為である。

いつものパターンですね。と彼に言われてしまいそうだが、このままダラダラ続けさせるのは性に合わない。

つまり、『R＊B』と『序文』は次のステップに進むというわけだ。

序文8　春姉物語を参考に大きな流れを組み込む工程、肯定。

私は自室に戻り、春姉から受け取った『参考資料』が入った書類ケース開ける。

中にはプリントアウトされた春姉の物語と、表紙にネタメモと書かれたノートが入っていた。まず私は春姉の書いた物語をざっと読む。

春姉の視点で死なない二人が語られ、途中で別の人物の視点に切り替わり、終わりへと流れる。

この物語が面白いのか私にはわからない。だが参考となる部分がいくつか見つかったのだから、よい面もあるのだろう。

春姉の物語を参考にして、私も書いてみようと思う。

春姉の物語のように、私自身を物語に登場させるのだ。そうすれば私の指もきっと踊りだすであろう。

しかし『R＊B』の物語に私を必要とする人物はいない。必要とされないのなら私が登場する意味はない。
どうしたものか……
私の出番が生まれるのを待ってみようか？

本編　戦う理由としばしの別れ

「ボンくんが死んだら、ボクもすぐ後を追う」
青式ヤオはそう言って片手を軽く振る。三度振って、四度目で手の平に水球を生み出した。
ヤオは生み出した水球をもう片方の手で強く撫で、水球に回転を加える。
「何故ボクたちは戦わなければならないのだろう？　戦うのが存在理由と皆言うけど、ボクにはよくわからない。この戦いに意味はあるのかと考えてしまう。ボンくんはどう思うかな？」
この戦いに意味などない。私がそう言うとヤオは「だよね」と呟き微笑んだ。
「青式と赤式の戦いが終わったら、北極に行かないかい？　北極で釣りをしながら食べる鍋はきっと美味しいと思うんだ」
北極で鍋を食べる。極限の寒さの中で、食べる鍋はさぞ美味しい事だろう。さらに釣りも楽しめる。ホッキョクグマを見ることが出来る。
私はその光景を思い浮かべ、とてもいい案だ。とヤオに伝える。
その間も水球は徐々に回転速度を上げていく。
「いつか終わるといいね……」
私は頷く。
「じゃあ、始めようか」
ヤオはクルクルと回転する水球から手をそっと離す。手から離れた水球は落ちることなく空中に留まり、回転を維持。

ヤオは水球を掴み取る。その瞬間水球は細長い形状に姿を変え濃紺の刀となり、ツラヌキとなった。
私は手を強く握り、その手に意識を集中する。手の中で脈を感じ取り、そこから熱を引き出す。引き出した熱を十分に集め解放。手の中の熱に輪郭を与えられ、熱は深紅の刀となり、私の赤式、キリサキとなった。
「また会う日まで、さようなら」
ヤオはそう言ってツラヌキの切っ先を私に向けた。濃紺の刀身がグニャグニャと歪み、螺旋状になる。
螺旋状に変形したツラヌキは青白く刀身を輝かせる。その光が合図となり周囲にある全ての青色が貫きに集まり始めた。
街から青という青が失せ、彩度を失い、灰色に変わる。
周囲の青を集め終え、ヤオは深くゆっくり息を吸い、短く吐く。
ヤオは一度ツラヌキを振るい、吸収出来なかった青を排出する。排出された青が滲むように辺りに漂う。その青は夜ように暗い色だ。
「一発目から本気で行くよ」
私が頷くとヤオはツラヌキに集められた青を解放した。ツラヌキの先端から黒といっても差し支えない青が爆発した。
轟音と共に衝撃が走る。私は身を屈めてその衝撃に耐える。周囲にあるものがなぎ倒されていく。私は
衝撃が去った後、風の音も聞こえない無音の世界が生まれる。
ここからが本番だ。
爆散した青がツラヌキを中心にゆっくりと渦巻き始めた。
ツラヌキが来る。
私は全身を巡る赤をキリサキに込め、初弾に備える為に構える。
世界に音が戻ってくると同時にツラヌキが放たれた。
視界が黒い青に埋め尽くされる。私はその青を切り裂く為にキリサキを振るった。
先ほどと比べられないほどの衝撃が私を襲う。ここで気を抜けば終わってしまう。ヤオの期待に応える為にも私の中に残っている赤

を搾り出してキリサキに全部注ぎ込んだ。目の前の巨大な青を未だ斬れずにいるが、このまま耐え切る。耐え切ってみせる。
私のキリサキは青色に侵食され始めた。キリサキが折れるのが先か、ツラヌキが終わるのが先か……
どちらにせよ、私は死ぬつもりでいた。私はヤオを殺すつもりなど最初からないのだから。
私が死んでも代替りを経て、私は再び青式に生まれる。だから、またヤオと会える。また戦う事になろうとも会えるのなら、私は何度でも死を選ぶ。
死ねばヤオとの思い出が消え手しまうのが辛いのだが、ヤオを殺す以上に辛い事などない。
だが、私は耐え抜いてみせる。だからヤオ！　全力で私を討て！
すでにキリサキから赤は失せている。キリサキを握る私の手も徐々青へと染まりつつある。だが、まだまだ耐えてみせる！
感覚の失せた両手から青が入り込み、肩までと侵食する。だけど倒れるわけにはいかない。
倒れるのはヤオの全部を受け止めてからだ。
赤が失せたキリサキが砕け散った。畜生……
私は青に飲み込まれた。意識を貫かれた。
身体の中から熱が逃げていく。全身の骨がギシギシと音を立てる。
辛うじて思えるのはヤオへ向けた言葉。
サヨウナラ。また会う日まで。しばしの別れを。

9　R＊B　レッド&ブルー（前書き）

誤字脱字訂正

9　R＊B　レッド&ブルー

八度目の序文。最後の序文。

甲本スイカは貴方に警告します。
この話から『R＊B』は更に退屈なお話になります。
このまま読み続ければ、きっと貴方は、貴重な時間を無駄にした。
と後悔する。
もう一度、大切な事なので伝えます。この物語は非常に退屈です。
思考せずに書き綴り始めるからです。回収はされません。
今すぐ読むのを中止し、貴方の人生を有意義に過ごしましょう。
以上。
甲本スイカは貴方に警告しました。

忠告、しましたよ？
私はしましたよ？
知りませんよ？

うふふ。
ふふふ。
あはは。
いやぁ、おかしいものだよ。
大変おかしい。
知らないよ？
ここから、本気でぶっ壊すから。
マジで後悔しますよ？
それでもよいのなら……

私は貴方を歓迎します。
ウェルカム・トゥ・マイ・ストーリー！　マイ・ワールド！
貴方が壊れた物語を求めるのならば、私は全力で書き綴りましょう。沢山の名を使い、私は世界を構築しましょう。私はこの世界を展開させ続けましょう。
退屈な世界に虹を架けましょう！　青空に沢山の薔薇を散りばめましょう！
全ては鏡を壊すの事から始まるのです。
笑いたいのなら笑うがいいさ。でも、私は本気だよ？

さあて。この物語を最大限まで楽しむ方法を提示して、最後の序文を締めくくります。
私は誰だ？　私は誰だ？
お前は誰だ？　お前は誰だ？
お前は私？　私はお前？

貴方に私の断片をプレゼント。

問題１

次の散文から連想するものを挙げよ。

１、２、３。

白、臼、甲、田、井、本、雪、春、水、絵、香、火。

半分繋がり、半分繋がらない。

ヒント

１は始まり。全ての雛型。故に白。

２は１を壊せなかったもの。故に臼。

３は１の発展系。白の発展系。故に甲。

１の１、２の２。３の１。

ヒント２

水と火。スイカ。水火、水火。

ああ、海に行きたい。対極のものが集められた海に。赤と青が集まる世界。

夏を見たい。夏見たい。本物の三番目。

今は三番目。過去の流れを汲み取れば、壊されるのが基本。

連想したものを一つ答えれば一点差し上げます。

三十点以上取れれば、まあ普通。

六十点以上で、そこそこすごい。

百二十点以上取れたのなら、お話を書くことをお勧めします。

もし点数が十点以下だったら……　あはは、追試しますよぉ。

まあ……　この問題に意味なんてないので、十点以下でも気にす

る必要はありません。ただのゲームなのですから。
さあて。
長らくお待たせいたしました。
分解、調整、再構築。
ここから本番。ここからが本当の物語。
私を解体し、意識を海へ空へ。
全ての決着を。

R＊B　レッド&ブルー

「赤と青は殺しあうほど仲がよい。青に対抗する事で赤は燃え上がり、赤の力が増せば青はより一層強大な力を手にする。それを繰り返す。それが私達の戦い。青がなければ赤は増えない。赤が増えれば青も増える。切っても切れない縁で私達は結ばれているんだよ」
そう言って赤式ヤンバルは頬杖をついて微笑みます。
「この戦いに終わりがない理由。それは赤が青に打ち勝つ事は出来ないから。赤は必ず青に負けて死ぬ。どういう意味かナナエちゃん。わかるいかい？」
わからないです。と私が答えると「赤が死ぬと青に飲み込まれ青となる」と柔らかな声でヤンバルは囁きました。
「負けた赤式は青式に飲み込まれて、青の一部となり、青式の一員として生まれ変わる。青式は特定の赤式を殺すと自然消滅する。ヤオの場合対であるボンを殺した事で存在理由がなくなったんだよ。

だから自害した」
　どういう意味ですか？　存在理由がなくなるって意味がさっぱりわかりません。
「ヤオはボンを殺す為に存在する。ボンを殺せば生きる意味がないんだよ。二人は繋がっているんだ」
　よくわかりませんよう。もっとわかりやすく教えてくださいよう。
「ナナエちゃんは青式と赤式で代替わりの方法が違うのを知っているかい？」
　ええ？　同じじゃないんですか？
「赤式では名前を継いでいく。例えば私が死ぬと、選定員が現れて、次のヤンバル候補を素質のある一般人から数名選ぶ。候補は多いときもあれば一人だけのときもある。多かった場合、候補全員を赤式の屋敷に住まわせ、青式と戦ってもらう。候補の中で最後まで生き残ったものがヤンバルの名を手にする……」
　へぇー、そうなんですか……　不思議ですねぇ……　うちではいつ代替わりしたのかわからないぐらいですから……
「青式では……　死んでも次の日には代替わりが終わっているだろう？　外見も性格もまったく同じ奴が生まれている。それは殺したのが対でなかったから。ヤオとボンを例として出すが、ヤオはボンを飲み込んだ。ボンはヤオの中で消化され血肉に変わる。自害したのはボンの記憶を引き継いで生まれ変わる為だよ」
　私が何を言いたいかわかるか？　と言ってヤンバルはスパゲッティとサラダ、ポテトフライを注文しました。
「私と君は対なんだ。君は私を殺さない限り、死ねない。君が嫌だと言っても私を殺さなければならないのだよ」
　何で私がヤンバルを殺さなければならないのかさっぱりわかりません。対なんて関係ないのです。私はヤンバルが大好きですから殺しません。
「大好きなら尚更だ。君は私を殺す」
　意味がわかりません。何故そうなるんです？

「君は何で私が好きなんだ？」
好きなものに理由など必要ありません！　それより何故私がヤンバルを殺さなければならないのですか！
「私を殺す理由……　青と赤の戦いが終わらない理由。これから話すのは、あくまで私の推測に過ぎないが、それでもいいのなら話そう」
是非是非お願いします。
「青と赤。赤と青は殺しあうけど仲がよい理由。それは青が死そのもので、赤は生そのものだからだ。死はそれだけで存在できない。生きているからこそ死が存在できる。生もそうだ。死があるからこそ強く生きようとする。死ぬからこそ子を産み、生を増やそうとする。仲がよいのは当たり前。生と死は二つで一つだから。争うのは死は生の幕を閉じ、生は死という終わりに抵抗するからだ」
ヤンバルは穏やかな表情で語り終えた時、注文した料理が届けられた。ヤンバルはポテトフライを一つ摘まんで口に放る。あの、スパゲッティ食べていいですか？
「いいよ」
やったー。難しいお話でお腹が空いてしまって大変だったのです。ありがとうございます。
「スパゲッティ、美味しい？」
うん。とっても美味しいです。デリシャスです。
「ナナエは私の対だと思う。だから私に死が近づけばナナエは先代ナナエのように狂い始める……　君の中には先代ナナエと沢山の先代ヤンバルがいるんだからね」
これからどうなるのです？
「私は赤式の力を使いすぎたせいか、あまり長く生きられない。近いうち私の赤が暴走するだろうね……」
その時は全力で私を殺してよ？　ヤンバルはそう言って笑いました。
サラダはぶちまけられる事なく私とヤンバルの胃に納まってしま

いました。

１０　Ｒ＊Ｂ　ＲａｉｎｙＢｌｕｅ（前書き）

誤字訂正。

10　R＊B　RainyBlue

R＊B　RainyBlue

シンと静まり返った夜。
場所は三上坂郊外にある市民公園。
禍々しいほど赤く輝く満月の下で赤式ヤンバルは、青い球体と対峙していた。
手に収まるほど青い球体の姿を、地球という言葉以外で形容できない。それだけよく似ていた。
「お久しぶり……　かしら？」
ヤンバルがその小さな地球に触れようとした時、そう声が聞こえて、ヤンバルは手を止めた。
周囲の気配を探るが、目の前の小さな地球以外におかしなものはなかった。
そこでヤンバルはこの小さな地球が声の主であると悟った。そして小さな地球をその手に取った。
「お前は一体何だ？」
ヤンバルがそう問うと、小さな地球は甲高い声で笑った。
「相も変わらず醜い姿だこと。そんな身体を晒してまで生き続けるなんて愚の骨頂」
吐き捨てるようにそう言って地球はまた叫び笑う。ガラスが割れた音の様なその声の主をヤンバルはようやく思い出した。
「お前は私が殺したはずだ。なのに何故生きている？」
ヤンバルは目の前の地球に疑問をぶつけるが、小さな地球はおかしいおかしいと叫び笑い、私が死ぬわけないでしょう。と答えた。
「貴方、何か勘違いをしていない？　私は貴方に殺された覚えはない。そもそも私は死なないし、生きてもない」
そこで地球はヤンバルの手から離れ、回転しながら空へ昇り始め

た。
「私は貴方の対じゃなくてよ？　私を劣悪品と一緒にするなんて失礼な人」
小さな地球はヤンバルの頭上でクルクルと回転しながらそう言った。
ヤンバルにはその言葉の意味がわからなかった。確かにこの声はあの狂人のものであったし、言葉の言い回しもあの時とまったく同じである。
「私は貴方に名乗った覚えはなくてよ？」
「お前は――」
瞬間、閃光。
小さな地球が放った眩い光によってヤンバルの視界は白に埋め尽くされた。
あまりの眩さにヤンバルは目を閉じ、目を光から守るために手をかざした。それでもヤンバルの目には焼け付くような白が飛び込んでくる。
長い事小さな地球は閃光を放ち続け、焼かれたヤンバルの両眼は二度と光を見ることができなくなった。
「赤と青の祖。青き星、赤き星。黒の一人娘。記録する者。この世界を統べる者……」
ヤンバルは闇の中で女の声を聞く。
「沢山の名で私は呼ばれる。神とか悪魔とかホント沢山の名よ。それはもうおかしな話よ。私は奪いも与えもしないのにね。形なき私の姿を捉えようなんて頭がおかしいんじゃないのかな？　この姿だって貴方が私を死と呼ぶからなのにね……　あ、ごめんなさいね。両目潰しちゃってたわ」
女の声はいつの間にか、感情のない冷えびえとしたものに変わっていた。
ヤンバルは視力を失いながらも、残る感覚でその女の場所を捉えようとした。

そこで自分の肌が風を感じる事が出来ない事に気付き、耳には女の声以外聞こえない事に気付いた。
「私は沢山の名を持つけど、誰も私を本当の名で呼んでくれない。哀しいお話だと思わない？　まあ教えてないから当たり前なのだけど……」
女の声が頭の中で響き、その痛みにヤンバルは呻いた。
「私の名前、教えて欲しい？　教えて欲しいよね？　本当の名を貴方に教えてあげる。私の名前は――」
――顔無き者だよ。
女がそう囁いた時には、すでにヤンバルの意識は途切れた。

＊

もうすぐ夜が明けようとする頃、雨が降り始めた。
ポツリポツリと降り始めた雨は徐々にその勢いを増し、激しくなった。
豪雨に彩られた市民公園の中央にヤンバルは立っていた。
天を仰ぎ、両手を広げ、全身を打ち付ける雨を感じとった。
「素晴しい世界だ……」
そうヤンバルは言って叫び笑った。
「やっとこの感覚を取り戻した！　綻びを暴く力を！」
ヤンバルは叫んだ。生まれて初めて玩具を与えられた子供のように歓喜の叫びを。
両目を失ったヤンバルの眼孔には雨水が溜まり始めていた。暗い穴の中で雨水は血と混ざり合い、深く暗い色となって頬を流れていく。
それはさながら血の涙の様だった。

11　×

R＊B　×

今日は私の再誕生日。
この幸せな気持ちを盛り上げる為にも、とりあえず、歌を歌おうか。
ハッピーバースディ、トゥーミー。
ハッピーバースディ、トゥーミー。
ハッピーバースディ、アンド、リバースディ。
ハッピーバースディ、トゥーミー。
最誕生日オメデトウございます。
欠片を一つ取り戻す事が出来た今日を始まりとし、全てを取り戻す為の戦いを再開しましょう。
次の欠片も取り戻し、すべて回収して私の顔を取り戻し、再び侵攻を開始しましょう。
さて……　この身体を手に入れたのはいいけれど、あまりにも部品が欠けている。
左指のほとんどを失っている。左足首から先もだ。この上なく醜い身体だ。
こんな不格好な姿では『私集め』に支障をきたす。
まずは、綺麗な指と足を手に入れなければ。
綺麗な指といえば、青式系列に誰かいるだろう。指を奪うついでに欠片も取り戻せば一石二鳥。
よし。と、その前に……
目玉も二つ用意しないと駄目ね。

12　R＊B　△

R＊B

「まだ寝ているのか！」

叫びにも近い怒鳴り声によって、オレはベットから飛び起きた。

ボンヤリとした視界の中で、眉間にシワを寄せて目を見開いた赤式エコーの顔を見つけた。

どうやら怒っているようだ。しかし、何に怒られているのか俺にはさっぱりわからない。

「まさかと思って来て見れば……　なんでお前はこう、いつもいつも……」

呆れたと言わんばかりのその言葉に、今日は何か特別な日だったかとオレは思い出そうとしたのだが、寝起き直後のせいか、何も頭に浮かんでこなかった。

時計に目をやれば午前七時。いつもなら午後になるまで寝ていても誰も怒鳴り込んできたりしない。しかし、今こうしてエコーが叩き起こしに来るという事から、今日はとても大切な用事があるのがわかる。

そして、それにオレが遅刻しているのもわかった。

「もう候補者達は来ている。直ぐに身支度を済ませ広間に急ぐんだ。そうでもしないと先輩として示しがつかないだろう」

候補者？　はて、何のことだろうか？

ここでエコーに尋ねてしまえば簡単に答えはわかるのだが、すでに彼は扉に手をかけている。

「私は先に行く。余りに遅いとヤンバルさんに殺されるぞ」

そう言ってエコーは勢いよく部屋を出て行った。

部屋に静けさが戻り、オレはもう一度今日の予定を思い出そうとした。キーワードは……　候補者だろうか？

候補者、広間。遅刻してヤンバルさんに殺される可能性のあるもの……

なるほど。まったくわからない。

よくわからないが、急がなくてはいけないのがわかった。

遅刻したぐらいで殺されてはタイムスの名が廃る。

オレは寝巻きの上にジャケットを羽織って広間へ走った。

＊

オレが広間に飛び込むと、サヤとボンを除いた赤式家全員がすでに揃って座っている。赤式家以外の人間、つまりは知らない顔も何人かいた。

皆、赤式家礼服を身に纏い、口を真一文字に締めている。ヤンバルさんは額にシワを寄せ、両目を閉じている。

物々しい雰囲気だ。そう感じながらエコーの隣にオレは腰を下ろした。

下ろすと同時にエコーが小言をもらしたのだが、聞こえなかった事にする。

一息ついて広間全体を見渡し、この場にいる人間のほとんどが知らない顔である事に気付いた。赤式の人間はオレを含めて三人しかいない。知らない奴らはざっと十数名いた。

あれは誰かとエコーに尋ねると、小さな声で雑種王関係と教えてくれた。

エコーは当たり前のようにそう言ったのだが、オレは雑種王という言葉に聞き覚えはなかった。

雑種王って何かと尋ねると、後でにしてくれ。と返されオレは黙るしかなくなった。

今更だが、寝巻きにジャケット姿はまずかったと後悔。

＊

足元まである三角形の赤い頭巾を被った人間が広間に入ってきた。その姿はさながら工事現場の三角コーンのようだと思った。

歩く三角コーンだ。

そう思って笑いそうになったのだが、必死に堪える。ここで笑ってしまったらヤンバルさんに何をされるかわからない。

三角コーンはヤンバルさんの前で立ち止まり、長い間を開けてから深々と一礼。ヤンバルさんは片手を上げて答えた。

すると三角コーンが叫びだした。

「今日はお日柄も大変良くこれ以上最高な日はないのでしょうそうでしょう！　さあ、今日は活きの良い五名の候補者を連れてまいりました！　それはもう大変元気いっぱい夢いっぱい！　大きな志と少しの不安を心の内でごった煮にした初々しい若人であります！今その姿をお見せしましょう」

入りたまえ。と三角コーンが叫ぶ。すると赤式礼服に身を包んだ五名の男女が広間に入ってきた。

三角コーンは五人をヤンバルの前に立たせ、どうだ。と叫ぶ。

「どうでしょう！　見てくださいこの肌のツヤ！　きめ細かくまるでお人形さんの様！　見てくださいここを！　ほんのりと赤がさしてるでしょう！　スラリと伸びた両手両足！　強い意志を感じさせる眼差し！　こりゃ活きがいい証拠だ！　どうだ！　どうなんだ！

ボンの名を継ぐのにこれほど最適な者は何処を探してもこの五人だけ！　絶対にもういない！　究極！　さあ、どうですか！　どうなんですか赤式当主様！」

どうなんですか。と三角コーンは体を震わせそう叫んだ。その言葉で今日が何の日か思い出した。次のボンの候補者が来る日だった

のだ。
三角コーンは五人の周りをグルグルと回り、どうだ、どうだ。と叫び続けた。
「とりあえず……」
ヤンバルが言葉を紡ぎ始め、三角コーンは足を止めた。
「良い。肌ツヤよし。とても元気そうだ。きっと良いボンになるだろう。ご苦労だった」
ヤンバルさんがそう言い終えると、三角コーンは奇声を上げながら走り出し、広間の外へと消えた。三角コーンが消えると同時に、雑種王関係の人間も立ち上がり、ソロソロと外へ出て行き始める。
オレは笑いを堪えながら、あれはなんなのかとエコーに尋ねた。
エコーは、選定員。とボソリと言ってため息をついた。

13　R＊B　□から始まる裏話（前書き）

ぶっ壊し中

13　R＊B　□から始まる裏話

R＊B　□から始まる裏話。

候補者五人を連れてヤンバルさんが広間から出て行くのを眺めながら、俺はこれからどうしたものかと考えた。

自室に戻って再び眠りにつくのも悪くない。昼過ぎまで寝て、夜に備えるのだ。夜の闇に紛れ、青式がいつ襲撃してくるかわかったもんじゃない。

屋敷内での戦闘を想定するとヤンバルさんは当然除外する。やり過ぎてこの屋敷も燃やしかねない。あの人は加減を知らない。まともに戦えるのは三人。オレとエコーとサヤだ。

サヤがこの場にいないことから、外出中と推測。いや、まてよ。今日はボンの候補者が来る日だからそんな馬鹿なことはしないだろう。ヘタすればヤンバルさんに殺されかねない。うむむ。赤式サヤは青式にやられた可能性があるな。うん。というわけで除外だ。

残るのはオレとエコーの二人だが、エコーは必然的に候補者の世話を任されるだろうからエコーも除外。

というわけからオレは夜に備える必要があるな。うん。そうに違いない。

寝たいだけだけど、今日はいつもと違うのだ。非常事態に備えて寝るのだ。

よし。帰って寝よう。と、その前に隣に座るエコーに許可を得ておかなくては。

「エコーさん、エコーさん。もう帰っていいよね？」

「ん？　ああ……　そうだな。もう解散したも同然だ。お前が帰ったところで問題はないはずだ。ところで――」

「だよね。じゃあそういうことで……」

オレは次に言うであろうエコーの言葉を遮って立ち上がった。そ

うでもしないと寝る時間がなくなってしまう。
「タイムス、折角だから庭いじりでもしていかないか？」
うわぁ出ました。エコーお得意の唐突なお誘い。
「そんなに嫌そうな顔をするな。別に庭の話がしたい訳ではない」
「じゃあなんだよ？」
「まあまあ……　話は庭についてからでもよいだろう。なあ？」
そう言って微笑むエコーにオレは逆らえん。得体の知れない気持ち悪さから誘いを断る事が出来ないのだ。
この様子じゃ夜になるまで寝れそうにないなぁ。
ああ、今夜青式が攻めてきたら全部エコーのせいにしよ。

＊

オレは縁側に座り、代々エコーが手入れしているという庭を眺めた。本当は見たくもないのだが、部屋に道具を取りに行ったエコーがなかなか来ないのでそれ以外することがなかったのだ。
小石一つ見当たらない黄土色の地面は気味の悪くなるほどノッペリとしていて平面に見える。奥に見える石造りの塀も同じく黒色ガラスで作ったと言われれば信じてしまうほど平面に見える。叩けば割れてしまいそうな塀が左右に延々と拡がっている。叩けば割れてしまうのではないかと思うほど繋ぎ目すら見えない黒一色。
吐き気を催すほど綺麗な庭だ。鋭角、直角、いたる所に四角四角四角！
こんな庭を造ろうと思った初代エコーは一体何を考えていたのだろうか？
そんな事を考えながら、エコーがやっと来た。隣に腰を掛けたエコーにオレは気色悪い庭を造りやがって。と目で訴えた。エコーはオレの眼を見て、何を勘違いしたのか「凄いだろう」と自慢げに笑

った。
「どうだ。完璧だろう？」
「何が完璧なのかオレにはわからんよ」
オレは思ったことをそのまま言うと、エコーはニヤリと笑った。
「この庭の人工物らしさだよ。この庭は自然のまがい物として、完璧なまでに完成されている」
「完璧なまでに気分の悪くなる庭だよ。今すぐ荒らしてやりたくなる」
「当然だ。ワザとこうしたのだから。さて本題に入ろうか」
唐突に話題を切り替えたエコーの言葉に、オレは何か心地悪さを感じながらも次の言葉を待った。
「あまり大声で話せる話題ではないのだが、雑種王関係についてだ」
雑種王関係。先ほど候補者達を迎えた時に広間にいた知らない奴らのことだ。
「雑種王。簡単に言ってしまえば私たちとは別の血筋を持つ者達だ。私たちの系列について、お前でも少しはわかるだろう？」
私たちの系列。赤式と青式の血筋について意味する言葉だった気がする。赤式と青式に流れる血は元を辿ればご先祖様は一緒だという話だ。
我らがご先祖は鬼と呼ばれていた男で、一人ぼっちで山に住んでいた。
彼は鬼と呼ばれていたが人里に下りて悪さをする類の者ではなく、彼の醜い姿からそう呼ばれていたらしい。
彼はその姿のお陰で食べ物に困る事はなかった。彼の姿を一目見ただけで山の動物は気を失い、お腹が空いたと思ったらその中から一つ選べばよいだけだった。
しかし何の原因でかある時から彼は気が狂ったように食べるようになった。最初は山に住む動物を捕まえては捕まえては食べ、山から動物がいなくなると次は木々を食らい、それもなくなると山そのものを食らい始めたらしい。

山を平らげたご先祖様は住む場所を失って人里に下りた。降りた後、彼がしたのはやはり食べる事だった。人を食べて食べて食べまくった。人がいなくなると村にあるもの全て食べつくした。
それほどのものを食べながらも、彼は満足せず、次から次へと目に付いたもの全てを食べていった。
気がつけばこの世の半分が彼の胃の中に収まり、とても大きな穴が開いてしまっていた。
そのことに気付いた神様は、これはどうにかせんといかん。と思い立って、彼の体を二つに分けた。どうやったのかは忘れた。
二つに分けられた彼は、自分の半身を見て気を失い、目を覚ましてもまた自分の姿を目にして再び気を失った。それを繰り返す中で神様は二度とこの世に戻ってくる事ないよう彼を空の一番高いところに運んだ。残った半身を彼が作ってしまった穴を埋めるのに使ったそうな。
そこからどうなったか忘れたが、赤式と青式が生まれたという話だったと覚えている。
「雑種王は私たちと同じような力を持ちながら、まったく別の血筋の者達の総称。そして赤式と青式を管理する者達と言ってもいい」
「そんな話聞いたことないぞ」
「話そうにも、誰かに伝える前に大体死ぬからな。このことを知っているのはヤンバルさんと長年この庭を見てきた私ぐらいだ」
そう言ってエコーは顎先で庭を指した。オレは指されたところがどこなのか探したのだがわからなかった。
というか、雑種王の話をヤンバルさんが知っているのはまだわかる。しかし庭を見ていたぐらいで知ることが出来たというエコーの言葉が理解できない。見ることに関して言うならば、代々タイムスは夢を見続けてきたのだ。庭を見るのと夢を見るのにそう違いがあるように俺は思えない。
よくわからん。オレは一旦考えるのを止め、雑種王がオレ達を管理する理由を考える事にした。

赤式と青式が争いを終わってしまわないように管理する雑種王。さながら神様だな。
「オレ達を管理してると何かとお得なのか？」
オレはエコーにそう訊いてみた。
「得か……　私たちを管理して雑種王に得はない。しかし管理してないと損することになる。赤式と青式のどちらかが消えると終わるらしい」
ほらきた。終わりを阻止する為に俺たちを戦わせる雑種王は、まるでご先祖様を二つに別けた神様じゃないか。
「何が終わるか私も知らない。しかし雑種王は終わりを恐れて私たちに殺し合いをさせている」
「そうなるとオレ達は雑種王に飼われているも同然じゃん」
「実際に飼われているんだよ、私たちは」
はぁ。なんか憂鬱。戦う意味がわかるかと思ったのに。
ん？　ちょっと待て。さっきエコーが妙なことを言っていたような……
「ねえ、この話を聞いてしまったら死んでしまうってことないよな？」
オレがそう尋ねてみたのだが、エコーはニヤニヤと笑うだけで答えなかった。

１４　Ｒ＊Ｂ　○へと続く夢の話

Ｒ＊Ｂ　○へと続く夢の話

目が覚めて窓の外を見れば、もう夕暮れ。時計の針の針は午後五時五分を指していた。こんな時間まで昼寝をするつもりはなかったのだが、夜になるまで俺に出来る事はない。何も問題はないはずだ。

もう暫く眠っていようかと思ったのだが、さすがに身体が鈍ってしまうだろうと思いなおし、俺は屋敷内をうろつくことにした。

部屋から出て、あてもなく歩き回っていると、いつの間にか庭まで来ていた。庭では五人のボン候補者相手にエコーが戦っている。戦闘訓練という奴だろうか？

キリサキを手に、候補者達はエコーに次々と斬りかかるのだが、ゆっくりとした動きでエコーは避け続けている。エコーも酷いことをするものだ。ヤンバルさんにだってエコーを捉えるのは難しいというのに。

候補者達が手を止めるとエコーは即座に攻撃に転じる。水の流れのように滑らかな動きで候補者の一人に近づき、乱暴な蹴りを放つ。赤式を使わずにそこまで出来るのはエコーが強いのか、はたまた候補者が未熟なのか……

エコーのことだから「一度でも私に触れられたら訓練は終了だよ」とか言って、候補者達でずっと遊ぶつもりなんだろうなぁ。

まったく……　新人さんが可哀想じゃないか。

まあ、エコーのお遊びで音を上げる様な奴は赤式にいらないか。

エコーの意地の悪い訓練から目を離し、今朝エコーの話した雑種王の事を考える事にした。

鬼と呼ばれた男の身体から生まれた赤式と青式。そしてその二つを消えてしまわないように管理し、『終わり』を阻止している雑種王。

赤式と青式の戦いが終わると別の何かも終わってしまう。
何が終わるのだ？　終わるのはオレ達の戦いだけだろうに。
雑種王は何の終わりを恐れているのだ？
終わり……　世界の終わり？
まさか。オレ達は世界の存亡に関わる戦いなどしてないはずだ。
俺たちが青式を打ち負かしたところで世界が終わるわけがない。
仮にオレ達赤式が世界征服を始めたとしても世界が終わるようには思えない。三上坂町にヤンバルさん王国が出来るだけだ。
逆も然り。青式達が何を考えているのか知らないが、あいつ等がそんな事出来るとは思えない。ナナエ朝廷を作って終了。
俺たちにはそのぐらいで限界だ。赤式と青式の力で世界征服なんてできゃしない。なのにエコーの話では、雑種王は俺たちの戦いに勝敗が付くことを恐れているようにみえる。一体何故？
……わからん。
雑種王の『終わり』というものが何なのか？　オレ達は『終わり』と、どう関係しているのか？
うむむ……
まあ、オレが考えたところで何かが変わるわけじゃないか。
それより、まだエコーは訓練を続けるつもりか？　これ以上は候補者達に何の得もない。いい加減やめさせないとな。

＊

「エコー、久しぶりに手合わせお願いできるか」
オレは、候補者達を一旦引かせ、エコーの前に立った。
「そうだな」
オレの登場に驚いた様子もなく、エコーは微笑む。まるでオレがそう言い出すのを待っていたような笑みだ。実際、待っていたのだろう。

「私も飽きてきたところだ。タイムスなら……　少しは楽しめるかな」
「皆さん。タイムス先輩がお手本を見せてくれますよ。危ないので離れて離れて」
　エコーはそう言って候補者達を庭の隅に行くよう指示を出す。ふんわりとした口調だが、刺々しい響きだ。
　何故目下の者に優しげな言葉で接するのか良くわからない。性格と口調のギャップが酷くて逆に怖がられそうだが……
「参考になるような試合になるよう頑張ってくださいよ」
　候補者達を退かせ、オレの十歩ほど歩いた先にエコーは立った。
「手合わせといっても赤式の使用は無し。それ以外は何でもありで。終了は開始から一分後でいいですか？」
「それでいい」
　オレがそう言うとエコーは声を出して笑った。笑った後、片足を内側から弧を描くように出す。
　オレも両足を肩幅より少し広めに開き、全身の力を抜いてその場で二三度跳ねる。
「私はいつでも行けますよ」
「オレも取り合えず……　大丈夫だ。行ける」
「では……」
　エコーは両足を曲げ、身を屈める。その姿はどこか陸上競技を連想させる。飛び込むタイミングを計ってる様だ。身体を前後に揺れ始めている。
　どうせオレから仕掛けてもエコーを捉える事は出来ない。エコーの身体能力は赤式の中でも飛びぬけて高く、ヤンバルさんと同等もしくはそれ以上あるかと思われる。オレが正面切って挑んだところでやられるのは必至。だからオレはこの場から動かず、体勢を低く構えて、エコーが仕掛けてくるのを待つ。
　エコーの攻撃を避けるのが第一ステップ。次のステップは隙あらばこちらも仕掛ける。最終ステップはエコーを拘束。まあ最後まで

行けないだろうが倒すのが目的じゃないしそれでいい。エコーに触れられなければまずやられる事はない。
初めから勝つ気で挑んでいるわけじゃない。対エコー戦でオレに出来る事は少ない。赤式無しでエコーに勝てるなんて思っちゃいないのだ。
つまり、負けなければ俺の中では十分なのだ。
さて、一旦考えるのをやめて目の前のエコーに集中しましょうか……。
いつ仕掛けてくる？　いつだ？
どう仕掛けてくる？　フェイントは有り？　それとも無し？
来るか？　来る？　来るぞ。
そう思った時、すでにエコーはその場で跳躍。目の前まで来ていた。
助走無しでこの距離を縮められると困るなぁと思いながらオレは前へ飛び込み回避。後ろからエコーの笑い声が聞こえた。
オレは両手で着地。と同時にその勢いを殺さず、回転しながらそのまま前へ。空と地面が入れ替わり、その中でエコーの後姿を見つける。
飛込み、空中で回転。そのまま踵落とし。相変わらずエコーはワンパターンだ。
エコーを見たら飛び込め。これが鉄則その一。
オレは両足で着地し、倒れるように左前へ。左手で体重を支え、勢いを殺さないようにそのまま跳ねる。空と大地が逆転した世界でエコーを確認。砂埃を上げて地面を蹴りこちらに向き直るその姿は、さながらドリフト走行といった所か？
体勢が整ったのかエコーは再び跳躍。この後のパターンは二種類。宙で回転して踵落としか、何もせずに着地して次に行くかだ。
一回オレも逃げる方向を変えなくては。
同じ方向に逃げるべからず。鉄則その二。
エコーとまでは行かないが、オレもドリフトしてみようか。方法

は……　うむむ……
　姿勢を後ろ倒して右足で着地。着地と同時に足先を左へ向ける。この勢いなら多分地面を滑るはずだ。後は倒れないようにバランスを取りながら右足を曲げて勢いを一度殺し、踏み込む。
　とりあえずやってみよう。
　片足で着地……　はまあ上出来。体勢を後ろへ……　よし。滑った。むむ、この状態から足先を左へ？　無理だろう。足首折れるぞ？　しようがない。このまま膝を曲げて踏み込む……　っておい。勢いが死んだぞ。まあいいや。これなら足先を左へ向けられる。よし。出来た。次は……
　右足のみで屈んで、身体の重心を後ろから前へ移し体勢変更。その後左足で姿勢制御……　そのまま蹴り上げ走る様に……
　よしよし。初めてにしては上手く出来た。でも何度も出来るものではないなぁ……　次をやれば右足がおかしくなってしまう。原因は運動不足かはたまたオレとエコーのスペックの差か……　まあなんとかエコーに向き直れたからよしとしよう。
　左側でエコーが着地したのを確認。砂埃が立つのが見えた瞬間、目に痛み。砂が目に入ってしまった。思わず目を閉じてしまう。
　視界を奪ってくるとは考えてなかった。目を閉じながら走れるわけも無く俺は体勢を崩す。身体が宙に浮いた感覚。これはまずい。着地不能。両腕で頭部を守る。
　背中に衝撃が走る。そのままオレはゴロゴロと転がり始めた……のだろう。目を開けようにもこればっかりは痛くて右も左もわからない。これは……　やられたな。
　転がり終わったのだが目を開けることも出来ずに俺は倒れたままだ。エコーの足音が右上から聞こえてくる。ああやられた。
「タイムス、まだ三十秒あるのだが……　これで終わりじゃないだろう？」
　うむむ。終わらせたい。
「まあ……　私の動きを真似するお前を見ていて楽しかった。真面

目に覚える気はないのか？」
「その話は聞き飽きた。オレはタイムスでエコーじゃない」
「そうだな、お前はタイムスだ。でも覚えて損はないだろう」
「完璧に覚えるなんて無理」
「タイムスなのに？」
嫌味な奴だ。タイムスだから無理なんだよ。
「……まあいい。一分経った。今日は終わりだ」

＊

手合わせを終えたオレはエコー達が去るのを見送って一人庭先に残った。どうしてオレはここに残ったのかわからない。なんとなくボンヤリとしたかったからだと思う。何か考え事をしていた気がするのだが……　忘れてしまったようだ。忘れてしまったのだからしようがないと自分に言い聞かせ、夜空に浮かぶ月を眺める。
深い青の中心に丸々とした赤い月が浮かんでいる。まるで穴の様だ。真っ赤な真っ赤な大きな穴。
今にも血が流れそうだなぁ。いやいや、流れないだろう。空は生き物ではない。それにあれは穴ではなく月だ。
ああ、馬鹿な事を考えてしまう。まるで最近よく見る夢の光景だ。
それにしても赤い月をよく見るなぁ……　そういえばこの頃満月の日が続いているような気が……　いや、そんな事ある訳ないか。オレの記憶違い。それこそ夢で見た世界。
はぁ……　月なんてどうでもいい。それよりも何かすることを探さなければ……
ん……　なにやら妙な気配を感じる。誰かオレを見ている……？
むむむ……　真後ろから？　まさかね。
いやいや、一応確認……　したいけど怖いなぁ。

お化けだったらやだな。いや待て。お化けなら尚更確認しなければ。いやしかし……

とりあえず……　声を掛けてみよう。

「……何か？」

後ろも確認せず俺は話しかけてみた。しかし反応はない。

やはり気のせいだろうか？　気のせいだろう。

「最近、どんな夢を見るのかしら？」

急に返事が返ってきた。やはりいたのか。

「何で夢の話を？」

「貴方、タイムスでしょう？　夢はタイムスが得意とする世界と聞いたわ」

まあ確かに得意ですが……うむむ……　どんな夢だったかなぁ？

それより……

「誰？」

オレは相手の声に聞き覚えがない。正直誰なのかわからない。

「私は誰でもないわ」

やはりお化けだろうか？　でも思っていたイメージと違うなぁ。お化けはもっとドロッとした口調かと思っていたのに意外にも存在感がある。硬質で透明な響き。水晶を砕いたらこんな音がしそうだ。

「それより夢の話を聞かせて。最近どんな夢を見るのかしら」

あー、夢の話……

「最近は鬼の夢を見る」

「どういう鬼の夢？」

ん。どんな鬼だったか……　姿かたちは人そのものだった気がするがそれでは鬼ではない。何か変なところが……

「歪んだ顔を持つ鬼の夢？」

「そう、そんな感じ」

「その鬼のどんな夢なの？」

「食べる夢……　かな」

「何を？」

「全部。見るもの全てを食べていくんだ。鬼が永遠と食べ続ける夢だよ」
「何で食べるの？　鬼はお腹が空いていたのかしら？」
いや、お腹が空いてたから食べるんじゃない。鬼は……
「悲しかったから……　かなぁ？」
「何故そう思うの？」
「泣いていたから……」
オレは頬に流れるものの冷たさを思い出す。
「嬉し泣きだったのかもしれないわ」
「違う」
「何故そう言えるの？」
「みんな迷信に惑わされ、彼を知ろうとしなかったから……」
「だから食べてしまったの？」
「違う。食べたのは彼じゃない……」
「誰が食べたの……？」
「それは……」
わからない。
「まだ、見ていないのね？」
オレは頷く。
「ならば、何がこの世を食べていたのかわかるまで夢を見続けなさい」
わかった。
「それより、君は誰なの？」
俺がそう尋ねると、耳元に冷たい息が吹きかかった。
「私が誰なのか……　私は私以外の何者でもない。どうでもよい事よ。もしかして……　私が誰なのかわからないと不安かしら？」
「まあ、ね」
耳元で声が囁く。
「私は貴方の見る幻。名前などない。存在もしない」
ふぅん……　変な幻だ。

「夢を見たらまたこの場所に……」
貴方の夢の片隅で待っているわ。

１５　Ｒ＊Ｂ　〇へと入った夢の話（前書き）

タイムス視点を一旦終了します。
３／１１　誤字訂正。

15　R＊B　〇へと入った夢の話

R＊B　クール3

オレは自室で目覚めた。
窓の外は暗く、まだ夜。部屋の明かりを点け時刻を確認。時計の針は九時ちょうどを指していた。
ボンヤリと時計を眺めながら、オレは一体何時寝てしまったのだろうかと考えた。
今日の出来事を思い出してみる。振り返り、どこで寝てしまったのか確認するのだ。
早朝、ボンの候補者達を赤式家に向かえ、その後庭でエコーと雑種王の話をした。
終わりを防ぐ為に俺達を死なないよう管理する雑種王の話を終えたオレは一度自室に戻り、夜に備え再び寝る。
次に起きたのは夕暮れ近く。時刻は確か五時五分。印象的だったので覚えている。
やる事はなかったオレは屋敷内をうろつく。庭でエコーがいるのを見つけ、ボン候補者達に訓練と称した遊びを眺める。
それを暫く見ていると候補者達が可哀想に思えて、邪魔をしてやろうと俺はエコーに手合わせを申し出た。
手合わせを終え、オレは一人庭に残り、ボンヤリする。
夜空に浮かぶ赤い月から血が流れそうだと考えていると、真後ろから妙な気配。誰かいるなとおもっていたら、声を掛けられた。
水晶みたいな声を持つ『俺の見る幻』と夢の話をして、何か妙な事を言われて……
そこから先の記憶はない。ここでオレは眠ってしまったのだろうか？　そう考えればオレがどうやって部屋に戻ってきたのか以外、何もおかしなことはない。

しかし、何か変な感じが……
先程の『俺の見る幻』と話した庭の光景を思い出す。
青く黒い夜空に真っ赤な満月が浮かび、突然現れた『俺の見る幻』そいつとオレは鬼の話をした。どこか夢の様な雰囲気で現実感がない。
あれは夢だったのだろうか？　だがそうなるとオレはエコーと手合わせしたのも夢となってしまう。
うむむ。あまり深く考えないほうが良さそうだ……　エコーとの手合わせが夢の一部なら、オレはエコーから雑種王の話を聞いた後からずっと寝ていた事になる。手合わせが夢だったと思うと虚しくなるが、まあ……　いつから寝ていたのか考えれば妥当な結論だろう。
さて、いつから眠っていたのかわかったところで散歩でもして身体を温めよう。

＊

寝巻きの上にジャケットを羽織ってオレは部屋を出た。
玄関へ向かって廊下を進むと、途中でヤンバルさんに会った。
「おうタイムス、今からお出かけか？」
そう言って下から覗き込むように身をかがめてオレを見つめるヤンバルさん。嫌に気分が良さそうだ。
「ご苦労ご苦労。外に出るんだろう？　ついでに用事を頼まれてくれ。割り箸を沢山買ってきてくれないか？　必要なんだ」
「何に使うんですか？」
ヤンバルさんは鼻で笑い、「工作だよ」と言った。
「急いでないからゆっくり散歩を堪能してきてくれ。でも忘れるなよ？　じゃあ頼んだ」

「了解です」
ヤンバルさんと別れ、面倒なことを頼まれてしまったと思いながら再び廊下を進む。
ヤンバルさんは割り箸で何を作るのだろうか？　というか割り箸で何か作れるのだろうか？　謎だ。
そんな事を考えていると今度はエコーと出会う。
「散歩か？」
「そうだ」
オレがそう答えるとエコーはため息を吐く。呆れたとでも言いたげに見える。
「まったく……　お前は寝るか散歩のどちらかだな。少しは他の事もやったらどうだ」
「青式とだって戦っているだろう？」
「まあそうなんだが……　それ以外は寝るか散歩だろう？　何か趣味とか見つけたほうがいいんじゃないか？」
「散歩が趣味だよ」
「散歩が趣味って……　お前は老人か？」
「庭いじりも老人の趣味だろう？」
「いやいや、庭いじりは孤高なる趣味だ。散歩と一緒にするな。あ、外行くんだろ？　ちょっと三号に町案内を頼まれてくれないか？」
「三号ってなんだよ？」
「ボン候補者の一人。名前がなくて不自由だから適当に仮の名前をつけた。で、三号が屋敷の周りに何があるか見たいらしいんだ。玄関に待たせている」
玄関に待たせている？　どういうことだ？
「じゃあ頼んだぞ」
オレが頷く前にエコーは去っていく。
玄関で待っているって、まったく意味がわからんのだが……　というか、何故オレが町案内をしなえればならないのだ。
もしそいつが男だったら蹴っ飛ばしてやる。男なら一人で散歩し

やがれと喝を入れてやる。女なら……　まあ、しようがないよな。
玄関に着くと女性のボン候補者がいた。
「あの、タイムス先輩。散歩に出かけるんですか？」
オレが声を掛ける前に相手から声を掛けられてしまった。
「もし良ければ私もご一緒していいですか？　この町に何があるのか見てみたいんです」
「そんな遠くまで行かないけどそれでもいいのなら」
「ありがとうございます！」
うむ。可愛らしい。好感の持てる返答だ。
オレは三号と共に屋敷の外に出た。

＊

赤色満月が浮かぶ夜空を眺めながら、オレと三号はヤンバルさんに頼まれた割り箸を買う為、コンビニに向かった。
暗い夜道を歩きながら、三号と二言三言夜空について言葉を交わしたのだが、オレは夜空について対して知っている事も少なく、つまりは話す事にもすぐに尽きて、オレと三号は黙って歩くこととなった。
コンビニが見えてきて、やっと着いたぞと思って入る。
割り箸を見つけ、棚にあるだけカゴに入れてレジに持っていく。
「今度は割り箸工作か。ヤンバルさんらしいな」
そんなことを店員が呟いたのを聞いて俺はギョッとした。
レジに立つ店員を見てみるとオレの良く知る男がはにかんで笑っていた。
「タイムス、そんな驚くことないだろう。そんな顔をされるとさすがの私でも悲しくなる」
そう言って赤式ボンは割り箸をバーコードを手に持ったスキャナで読み取っていく。

「お前は死んだはずだろ？」
「死んだよ。死んだからあの子が赤式に来たんだろう」
ボンはお菓子コーナーにいる三号を顎で指した。
「あの子はボンに向かないかな。少し、儚げな印象……」
「それより何でお前はここに……」
「そんな事はどうでもいいだろう？　それともあれか。死んだら出てきちゃいけないわけか？　悲しいねぇ」
割り箸をレジに打ち込み終わったボンは「全部で二千八十円だよ」と言った。オレはポケットからケータイを取り出し「お財布ケータイで」と答えた。
電子音が流れ、レシートの排出音がガタガタ鳴る。
「私は死んだ。実際ヤオのツラヌキに飲み込まれ身体も失ったのだから当然。だけど、こうしてお前の前に現れてはいけないなんて誰も言ってないだろう？」
「お前は誰なんだ！」
ボンは笑う。
「お前の見る私の幻だ。ほら、可愛らしいボン候補者が立ち読みを始めたぞ？」
ボンが指で指す先を見れば確かに三号は週刊誌を読み始めている。
「気をつけろよ」
ボンの声でレジに視線を戻すとボンは消えていた。
オレは投げ出されたようにレジ台に転がるバーコードリーダーの赤い光が繰り返す点滅をジッと見つめた。

＊

割り箸を買い終え、オレは三号に町案内をする為、遠回りをしながら屋敷に向かった。

この坂を上ると廃工場があるんだ。とか、この道をずっと真っ直ぐ行くと変な名前の研究所があるんだとか俺は三号に話し続けた。だが、先程のコンビニで、レジを打つボンの姿が頭から離れる事はなく、オレは悩んでしまう。

死んだはずのボンが現れる。本来そんな事は起きない。目を放した途端ボンは消えてしまったのだから、あれは俺の見た幻だと断定できる。それがわからなくなるほど俺は狂っているつもりはない。オレを悩ますのは幻が口にした「お前の見る幻」という言葉だ。

ボンの幻が口にしたその言葉。それは夢の中で水晶の声を持つ奴の言葉とまったく同じ意味だった。それ自体は特に特に問題はない。偶然の一言で片付けられる。しかし、夢でも現実でも同じことを言われて、オレは今見ているこの世界は夢なのかもしれないと思ってしまう。夢と現実か混ざり合って、今オレはどちらを見ているのかわからなくなっている。

「タイムス先輩、どうかしたんですか？」

三号の声にオレは「なんでもない」と返す。瞬間、三号もオレの見る幻なのかもしれないと考えて気分が悪くなる。

「体調が悪そうに見えますよ？　大丈夫ですか？」

「大丈夫。それよりもあれを見てごらん」

このまま根掘り葉掘り訊かれると混乱が酷くなりそうだったので、オレは話題を変える為、適当に空を指差した。

「ああ、気付きませんでした。今日は満月なんですね」

そうそう。満月なんだ。だけど今日も満月なんだ。ボンが死んだ日辺りからずっと満月が出ているんだよ。

「少し赤いですね……」

オレは赤色の月しか見たことがない。

「タイムス先輩はよく見るんですか？」

よく見るよ。毎日毎日頭がおかしくなりそうなほど。

「本当に大丈夫ですか？　どこか具合が悪いのなら……　そこに公園で少し休みましょう」

こんなところに公園が？　ないはずだ。
オレは三号が指差すその公園を見て、眩暈がした。
市民公園。ここはボンがやられた場所じゃないか。

＊

オレは嫌だというのだが、三号に手を引かれ市民公園の中へと連れて行かれた。ベンチにオレを座らせ、三号は辺りを見渡し「飲み物を買ってきます」と言って駆けて行った。
何故オレはこんなところに来なければいけないのだ。こんなところに一人でいたら嫌でも夢の事を考えてしまう。
この世界は夢か真か……？　ボンがヤオと戦い死んだのも、サヤがヤンバルさんの怒りを買い殺されたの全て夢の出来事か？
夢なんかじゃない。
でも……　絶対とは断言できない。
わからない。
「タイムスでありながら、夢に飲まれるとは何事かね」
声がした。最初三号が言ったのかと思ったのだが、見れば先代の赤式タイムスであった。初めて会ったはずなのにオレはすぐに先代と気付けることから、これも幻なのだろうと考える。
「混乱しているように見えるが……　隣、座っていいかい？」
オレが答えずに無視すると、幻は「勝手にさせてもらうよ」と言ってオレの隣に腰を掛ける。
「オレは悲しくなっちゃうよ。現行のタイムスがもう夢に食われ始めてるんだから……　情けなくてオレ、泣いちゃうよ？　うえーん……　はぁ……　無視ですか。困ったなぁ、これでも助けに来たつもりなんだが……」
助け？　何をだ？　何を助けると言うのか？

これも俺の見る幻なのだろうか？
「オレは一応先代としてだなぁ……　あれだ。夢について悩んでいるようだから解決方法を提示しに来た訳だ。夢と現実の区別がつかないんだろう？　よくある悩みさ。みーんな一度は悩む問題だ」
そう言って先代タイムスは指を鳴らす。すると目の前の地面が渦巻き、グニャリと歪んで大きな穴が開いた。
「単刀直入に言う。この穴の下にはタイムスの見る夢の全てがある。君はその夢を全部見てまとめて欲しい。これが君にオレが唯一出来るお助け」
「何故、穴の中に？」
「タイムスの名を継ぐ者の決まりだ」
「初めて聞いた」
「そりゃそうだ。初めて教えたのだからね。というかタイムス以外にこの事を知っている奴はいない。赤式も青式も、雑種王ですら知らない」
「まるで雑種王の事を先代さんは知っているような言い方ですね」
「オレもタイムスとして、穴の中で全部を見た。だから知っている」
「つまり……　先代さんもこの穴に？」
「当然だ」
これは酷い幻だ。それと話しているオレもどうかしている。
「これは……　夢ですか？」
その言葉に先代の幻は困ったように眉をひそめる。
「それに答えたら何かわかるのか？　お前はオレを幻だと思っているなら十分なはずだが……　と入るのか？」
「入るとどうなるんです？」
「タイムスが見てきた夢を全部見ることになる」
「つまり……　夢を見ると？」
「その通り！　どうする？　入るか？」
「入ったら二度と夢から覚めなくなるとかいうオチが待っているんでしょ？」

「わかってんじゃん」
うわ。マジかよ。とていうか先代はそれで死んだのでは？
「いや、誤解するなよ？　夢から覚めないだけで死ぬわけじゃないさ。穴の中で夢をまとめたらちゃんと戻って来られるからさ。俺が死んだのは顔なしにやられたからで……」
「あー、面倒なのでその話はいいです。死なないんなら入りますよ」
「え？　マジで？　入っちゃうの？　いや、いいんだよ？　それは大変結構なことだが……　お前、この状況わかってる？　オレがこの話を先代からされた時そりゃパニくったぞ？　なんでそんなに冷静なの？　なんかすんげぇムカつくんですけど。っていうか――」
ああ、先代話長い。この穴の下で夢を見ればいいんだろう？　もういいよ。
オレはベンチから立ち上がり、目の前に開いている穴を見る。穴は自動車も落ちてしまいそうなほど大きい。近くから覗いて見ると、真っ暗でどこまで続いている。中に吸い込まれるような感覚がして、思わず腰が引けてしまった。
この中に入っても死なない。夢を見るだけ。更にはオレの頭を悩ます問題も解決できるかもしれないのだ。もしこれがオレの見ている幻ならば、穴に入ったところで問題を悪化させる事はないだろう。『穴の幻覚』に飛び込んだところで死ぬとは思えない。前後不覚に陥り足を挫く程度だろう。
「先代さん、ちょっくら行って来ますよ」
オレがそう言うと、先代は一人で話すのを止め、「わかった」と頷く。
「穴の底でタイムス……　っていうとわかり辛いな。その下で先輩達がお前を待っているはずだ。まずはその人たちに会って、案内してもらうといい」
「先代さんは行かないんですか？」
「オレはただの案内役だから、お前がその中へ入るのを見送ってサヨウナラ、だ。安心しろ、綺麗さっぱり跡形もなく消えてやるから

よっ！」
そう言って先代の幻は大げさに笑う。
何か上手い事丸め込まれた気がするが、まあいい。
オレはポッカリと地面に空いた穴に向き直り、息を大きく吸う。深呼吸して、気持ちを落ち着かせる。
大丈夫。夢をちょっと見てくるだけだ。死にはしない。
オレは穴の中心目指して地面を蹴った。身体がフワリと浮いて、そのまま穴の中へ落下。
上を見ると穴の入り口は親指で隠れてしまうほど小さくなっている。
ちゃんと帰って来いよ。と先代の声が聞こえて、オレは絶対に帰ってきます。と答えた。
オレは落ちる先を見る。どこまでも暗く、底に未だ到達しない。いつになったら着くのだろうかと考えて飲み物を買いに行った三号のことや、ヤンバルさんに頼まれた割り箸を思い出した。
突然オレがいなくなって、三号はさぞ驚くだろう。ヤンバルさんには……　殺されてしまうかもしれない。
まあ……　帰ってきた時に謝ればいいか。

１６　Ｒ＊Ｂ　一つに戻る（前書き）

青式ナナエ視点開始。

16　R＊B　一つに戻る

R＊B　一つに戻る

朝の食卓。それは青式家全員が集まるという大変貴重な時間です。
今日も一日頑張ろう。と元気一杯ご飯片手に味噌汁をすする時なのです。そうやって何年も何十年も続けて赤式と戦う日々を過ごしてきたのですが……
最近、急に険悪なムードになりました。
原因はキノコ鍋……　でしょうか。
イチは、ククに殺された次の日から眉間にシワを寄せてそれはもう不味そうに味噌汁を啜っています。
そんなイチの姿にククの箸を持つ手は震え出し、今にも怒りが爆発しそうな感じです。
「何で私ばかり……」とククは呟いて、ヤオを睨みます。ククがイチを殺してしまったのはキノコが原因らしく、ククからしてみたらそのキノコを持ち込んだヤオが全ての原因なのでしょう。
ククに睨まれて、ヤオは申し訳なさそうに視線を落とします。
何か……　釈然としません。
ククがイチを殺してしまったあの日、私はこの三人に何があったのか詳しくわかりません。イチがクク殺された事に根に持つのもわかります。ククがキノコを持って帰ってきたヤオを睨むのもわかります。ですが……
「今日は皆で釣りに行きましょう！」
私はこの場の空気に異議申し立てです！　こんな状態で一日の始めたくないのです！
「釣りです！　皆で魚を釣りまくって楽しくなりましょう！」
「釣り……　ですか。いいですね」
お、さすがヤオくんです！　ノリが良いです！

「ヤオくんは行くの決定！　はい、ククちゃんとイチくんはどうします？」
「魚ですかぁ……　釣ったその場で捌いたら美味しいでしょうねぇ……」
　そうですよククちゃん！　釣ったその場で刺身です！　漁師の如くその場で刺身です！　ドンブリにしても可です！
「俺、行きます」
　イチくん！　そう言ってくれると信じてました！
「でも、遠慮しておきます」
「ありゃ、何故ですかククちゃん！　美味しい刺身作ってくださいよぅ！」
「体の大きなガキが行く様なので遠慮します」
「おい、それは俺のことか？」
「ん？　そうよ貴方の事よ。なんで私が貴方の為に刺身を作ってやらなきゃならないのですか？　サッパリわかりませんよ。なんでですかー？　というか貴方が行くから私が行かないのは可笑しいよね？　イチが行かないのが正解よね？　あれ？　イチは行くの？　何で行くのさ？　刺身が目当てだったら、ふざけるなと私は言うよ。ああ、もう言いたい。ふざけるなっ！」
　ああ、ああああ、このタイミングでククちゃんは反撃に出ましたか……
「なんだよ。いいだろうがそんぐらい。第一なんでそんなに怒るわけ？　まったくわからんわ」
「いや、イチさん。それは流石に言ってはいけないような気が……」
「あ？　なんだ？　文句あるわけ？　お前があんな得体の知れないもん持って帰ってきたから俺は殺されたんだろうが。それ忘れたわけ？　なあヤオ。可笑しくないか？　あはははは。可笑しいよヤオ」
「ボクが原因なのはわかっています。謝って済むのならいくらでも謝りますから……」
「一旦ストップで――」

「じゃあ死ねよ！　俺と同じように死んでみろよ！」
何で、何で……　私はこういう雰囲気が一番嫌いだって皆知っているはずなのに……
「それでイチさんがククさんを責めるのをやめて頂けるのなら死にましょう」
ちょっと待てよ。私は満足できませんよ。待て、ヤオ。
「ヤオくんちょっ――」
ヤオは手に生み出した水球を自分の首に当てて。
私が止める間もなく。
瞬間、食卓に赤。
私が呆気に取られていると、イチの笑い声が聞こえた。何が可笑しいのだと私が見ると、また赤が咲いた。
イチの頭部はククの水球によって砕かれ散った。
「あはは……　ザマミロ……　私は貴方をいつでも殺せるんですよっての！　お前は二度と戻ってくるんじゃねぇっての」
皆なんでこんな事をすぐに始めてしまうの？
何でなの？
嫌だ。嫌な空気。
皆、一度私の中に戻るべき……
「とりあえず、ナナエ様も死んでくださいな」
水球を両手に生み出し、ククは笑っている。
もういいや。皆還れ。
私は人差し指をククに向け、命令する。
「還れ」
私がそう宣言して、ククの身体は一瞬にして水へと変わる。
元々私達に身体はないのだ。青式という名の水でしかないのだ。
イチとヤオを水に戻し、水となった三人を集め、一つの水球へ変えて宙に浮かべる。
私は水球に触れて、全て体内に取り込む。
ククヤオ、イチの三人が私の中に入ってくるのを感じ取って、

さっきまで感じていた嫌な気持ちを頭の中から振り払う。
よし！　これで皆で釣りにいけますね！
私はヤオの代わりに釣りをしましょう！　釣った魚はククの代わりに捌きましょう。　作った刺身はイチの代わりに食べましょう！
うん！　最初からこうしていればよかったんだ。
皆、私の中に戻してしまえばよかったんだ！
何で私は自分を分けてまで家族を増やしていたんだろう？
もう！　私ってお馬鹿さん！　家族を増やせば面倒なことが増えるだけなのに！
はあ、もう憂鬱です……
「はい。皆で今から釣りだー、大漁目指してガンバローー」

17　R＊B　れありー？　ぶっ壊れぇ？

R＊B　れありー？　ぶっ壊れぇ？

「いざ、大漁目指してガンバロー」

おー。

「ナナエ、先程購入した『素人でも大丈夫海釣りセット』から釣竿を出すんだ」

了解です！

釣キチ三四郎と書かれたビニール袋から『素人でも大丈夫海釣りセット』を取り出し、私はそれをジッと眺めた後、ガバッと開封アンド釣竿をズバッと取り出す！

「よし上出来だ！　その敏捷性にヤンバルも目玉が飛び出さんばかりに驚くぞ！　さて、ナナエよく聞くんだ。それは竿だ。しかもただの量産品だ！」

そのぐらいわかりますよ！　馬鹿にしないでください！

「わかっているのならよい。だが！　この竿はこの世に二つとない。ミクロでマクロな視野で見ればこの竿とて唯一無二の存在だ。この世に唯一つの『ナナエの釣竿』だ！　肝に銘じろって、ナナエならそのぐらいわかるであろうこと請け合いなのだが言いたかっただけだ。すまん許せ」

わかりました！　許します！

「許された。よし、次だ！　次はその夏休みの工作的な安っぽさ全開の釣竿の先から伸びる糸を見つけるんだ！　透明の糸だ！　名称は……　確かテグスだ！」

見つけました！

「その透明な糸は太陽の明かりを生々しく反射し、ナナエの眼中へ深く突き刺さる。テグスの光はナナエの脳髄目指して奥へ奥へと進み、その様子はまさしくグロテスク……」

なんですかそれは？
「いや、言いたかっただけだ。とにかく！　テグスの先端を目の前の海、遥か先にある水平線へ見せ付けろ！」
イエス・サー！
私は珍妙なるこの透明の糸「テグス」の先端を人差し指と親指でつま――　めません！
なんですかこれは！　つまめません！　そもそも糸なんて見えませんよ！
「そうだろう、そうだろう。なにしろ透明の糸なのだから見えてもらっては困る」
というか糸そのものが無いのでは……
「その通りだナナエ君。良くぞ見破った。その糸は裸の王様宜しく馬鹿には見えない、否！　馬鹿にしか見えないのだ！」
ではどうしろと！
「馬鹿になれ」
なるほど。その通りですね！
ようし！　馬鹿になるぞ！
むむむ！　釣竿の先っちょから糸が出ています！　これはなんですか！
「先端から迸るパトスは透明な糸、人はそれをテグスと言う。欲情した釣竿から迸るテグスをナナエは両の手の平で受け止め、ただ呆けた顔でジッと眺めている」
む！　なんですかそれは！　流石におふざけが過ぎます！　というかなんですかこの雰囲気は！　まるで四番目のようじゃないですか！
「五話構成で数えると一応このお話は四番目の二番目なんだ。少しくらいいいじゃないか」
駄目です！
「わかった。話を戻そう。ええっと……　どこから話せばいい？」
最初からです！

「ということは、一人ぼっちになったナナエが釣りをするという妄想を始めるところから語ればよいのかな？」
いえ、そこは省いてください。宜しくお願いします。
「了解。では……」

今回のあらすじ
自分以外の青式を全て取り込んだ青式ナナエは、余りの寂しさにピーヒョロヒョロでピーヒョロヒョロな事情とメンドクササにより、割愛と言う名の怠惰を混ぜつつ、釣りをする妄想を始めた。
青式ナナエは心の中に住む教官（脂ぎった独身男性を想像したら私の勝ちなのだよ明智くん。前職はカメラマン。その実体は今は無き国のスパイのようで正体不明の未確認歩行生物宜しくこの世のものではない少年の姿をした小動物系グロテスクテグスっぽい何か）の指示に従い、妄想の海釣りを始める……

「こんなところでどうだろうか？」
意外な事実がわんさかです。
「いや、八割嘘だ。そもそもこの話は虚構の中の虚構のそのまた下にある虚構であって、私の詳細など意味をなさぬのだよナナエ君。嘘がひっくり返り続ければ本当になるというか……　まあよい。このまま流れに身を任せてみよう。はいカット！　ビスケット！　ナナエは一度ストップ！」
了解でーす。

さてさて……
いやぁ、突然の私登場。　ナナエの妄想内に生きる教官役のスイカです。
正直参っちゃってるんですよ。ホント。
何に？　と聞かれたらそりゃ『あれ』としかいえませんよ。
いやー、マジで姉妹全員でビビリまくリングウィンターですよは

い。雪姉なんか崩れた本に埋もれて以下略。春姉は動き出したサイコロを見て以下略。
ストップしましょう。
はいストップー。
ストップ！
止まれ！
もういい！　もういいよ！　勘弁してくださいよ！

ああ……
ええっと。私の話は置いておいてＲ＊Ｂの話を少しします。
Ｒ＊Ｂ。
私の妄想の中で進行していく物語。それプラス、私の思考とかその辺をごった煮したものです。
Ｒ＊Ｂに私の話を加えたのは、私自身が多重構造ネタ、つまるところのメタっぽいものが好きだからです。悪く言えば予め逃げ道を用意していた……　ということなのです。
こういう『何でもあり』を予め用意しておく事で、いくらでも私は物語を好きなように捻じ曲げる事が出来ます。実際二回捻じ曲げました。

『ご都合主義、嫌いですか？』

そう尋ねられたら貴方は嫌いと答えますか？

ご都合主義なる物語と聞くと、無理やり辻褄を合わせたお話という悪いイメージが浮かびます。読む側としては　気分が悪くなります。

ここで私が『R＊B』はご都合主義の塊だ！　と宣言したら、どう思われますか？

嫌い、と答えますよね……？

嫌いと答えるでしょう？

そうでしょう。

そうじゃないと私は困ってしまいます。

これでもかと作者の都合で捻じ曲がる『物語』は嫌いでしょう？

貴方が今読んでいるのは、最低の部類に入る物語。嘘を平然と宣言する虚構の世界なのですよ？

もう、私は駄目なのかもしれません。

この物語は書きあがらないかもしれません。

幕を閉じた時、残るのは沢山の矛盾だけかもしれません。

元ネタは過去の作品。

過去の作品の元ネタは、私が今まで読んだ物語。
その物語の元ネタは……

上手く思考がまとまりません。
ごめんなさい。
私はまた失敗をしてしまいました……

最後にこの物語の終わりを明示して『R＊B　れありぃ？　ぶっこわれぇ？』を締めくくろうと思います。
少しスペースをあけて書きますので、気になる方だけどうぞ……

この物語の最後は全てが一つに戻り、次の物語に発展する。

少し濁してしまいましたが……　許してください。
皆一つになるという終わり……　です。

18　R＊B　and？　or？　if？

ブレイクな断片

そろそろR＊Bへと戻りましょうか……
なるべく自然に不自然に繋いでいきましょう。
無理やりでもR＊Bへ繋がないと私のお話が終わらなくなるので……
というかスイカパーソナルが崩れつつある。気をつけろ私。

再開！　スタート！　カスタード！

「ナナエ！　ここからはお前一人の力で頑張るのだ！」
突然叫んだ教官。私はビックリして釣竿から手を離してしまいました。
なんですかいきなり！　ここからは私一人で頑張れって魚釣りはどうしたのですか！　途中放棄ゼッタイ駄目！
「嫌だ！　私は水平線の遥か先にある超古代都市フランダンスに用事があるのを思い出したのだ！　非常に忙しいのを思い出したのだ！」
超古代都市フランダンスって何ですか！
「超古代都市フランダンス。そこにはケンジの石があってだな。私をそれを手に入れて全知全能のケンジになるのだよ！　だがな、フランダンスたちがケンジの石を守っている。フランダンスとはブリブリ踊りをする腐乱死体たちのことで、それはもうブリブリと踊るのだよ。でだな、私はそれを千切っては投げ千切っては投げのすん

ばらしき戦闘能力披露をした後、フランダンス城に眠るケンジの石を手にしてここに戻ってくる。そして木になろう。全知全能のケンジはその力を使って一本のヒョロッちい木になりました……　と。悪くないだろう？　木になればナナエを太陽の日から守ってあげられるのだぞ。そん時は晴れているといいなぁ……　雨なんか降ったら木になる意味がない。というか、これは絶対回収不能の一発ギャグ的飛び道具な言葉遊びネタだ！　想像するだけ馬鹿だ！　絶対に考えちゃ駄目だぞ！　さらば！！」

そう叫んだ後、教官は海へ飛び込みました。

私が「行かないで」と懇願する間もなく水平線の遥か彼方へ消えていきました。というか教官！　平泳ぎで何でそんなに早く泳げるのですか！　ひとかき三百メートルですか！　なんですかその身体能力は！　何でもありですか！　というか意味わかりませんよ！！

もう！　また私一人ぼっちです！　もういいです！　私も帰ります！

R＊B　　and？　or？　if？

想像の世界を一旦打ち止めて、目を開ければ食卓に私は一人。

食べかけのご飯と味噌汁。それらは片付けられる事なく、私は一人になったのだと思い出させる。

今、青式は私一人です。

皆、私の中に戻した。だからナナエは一人なのです。

一つに戻った事を私は後悔はしません。ククもヤオもイチも、私の身体を分けて生み出した者たちなのですから私の中に戻したところで、悲しくなんかありません。

悲しくなどないのです。悲しく思う必要はないのです。

寂しくなんかないのです。
寂しく思ってしまうのはおかしいのです。

＊

朝食の後片付けを終えた時には昼になっていました。食器を洗うことすら満足に出来ず、全部ゴミ袋へ詰め込む事で何とか終わらせた次第です。
時計の針は午後一時を指そうとしています。お腹が空きました。
待ったところでククはもういません。と言う事は私が昼食を作ると言う事なのです。
冷蔵庫を開けます。冷蔵庫の中にはニンジンや玉ねぎ、キャベツやホウレン草。お肉もあります。醤油なる液体もあります。
これだけあれば何か作れるはず。と私はそれらの食材を眺めて、ある問題が頭の中で浮かび上がりました。
この材料で何が作れるのでしょうか？
考えてみると私は生まれてから一度も料理をしたことがありません。恥ずかしい事にご飯の炊き方も知らないのです。
私は冷蔵庫をパタンと閉めます。私は昼食すら作れない無能人間だと気付いてしまったのです。
料理は楽しいです。とククは言っていましたが、私に楽しむだけの知識がありません。
昼食の作る事の出来ない私はコンビニへ行くしかありません。
コンビニへ行くからにはお財布が必要です。
私はお財布を取りに自室に戻ります。
お財布を机の上に置いておく習慣をつけるように。ヤオに言われていたのですが、昨日の私はそれをしなかったようで、机の上にお財布はありませんでした。

お財布は一体どこだろう。と部屋の隅々まで探しましたが見つかりません。
お財布が無ければ買い物できません。買い物できなければ昼食すら食べられないのです。
探し続けましたが、見つかりません。もしかしたらこの部屋にないのかもしれません。
そう考えた時、携帯電話が鳴りました。
こんな時に誰でしょうか？
携帯電話を手に取れば、画面には『赤式ヤンバル』と表示が。
私はすぐさま通話ボタンを押します。

＊

「今日で終わらせよう」
開口一番ヤンバルはそう言いました。私には何を終わらせるのかわかりませんでした。
「一体何の事ですか？　いきなりどうしたのです？」
「全部終わらせるんだ。赤式と青式の戦いも鬼の物語も全部全部」
ヤンバルの口調は抑揚なく、平坦で淡々としています。
「全部部品は揃った。だから終わらせよう。私達の物語を終わらせるんだ」
「何の事かさっぱりですよ。何かあったのですか？」
私がそう言うと、ヤンバルは黙り込みます。何か……　あったのでしょうか？
「私に何があったかなんてナナエはわからなくていいんだ。駅前で待っている」
待ち合わせ時刻は、と私が尋ねる間もなく、電話は切れました。

受話器から聞こえる音は、輪郭のぼやけた丸い形をしていました。

＊

急に切れた電話。

何か嫌な予感がして、私は靴も履かずに家を飛び出しました。

靴を履くより、財布を探すより、空腹を満たす事なんかより、ヤンバルが一番大切なのですから当然です。ヤンバルが私を必要としてくれるのですから急がないわけがありません。

ヤンバルの言った「終わらせよう」という言葉が何の意味を持つのか私にはわかりません。

ヤンバルは赤は青に勝てないと言った理由も、私がヤンバルを殺すと言った意味も、殺してと言った真意も私にはわかりません。赤と青が争う理由すら私にはわからないのです。

私達の戦い。それがヤンバルを殺すことで終わるのなら、私は終わる事を望みません。

ヤンバルは私の大切な友達です。ヤンバルが好きです。必要です。

ヤンバルは私をどう思っているのかわかりません。もしかしたら、私が嫌いなのかもしれません。

もし嫌いと言われたら……

ああ……

あー。

止めましょう。気分が滅入ります。

それに私は考えることがあまり得意ではないのです。考えれば沢山の言葉が頭の中でグルグル渦巻き、脳みそがバターになってしまうのです。身体を動かす方が私は好きなのです。

素足で走るコンクリートの感触は硬くザラついています。

吹き付ける風の冷たさ。私の大好きな乾いた風。
その風を切り裂くほど足が速ければ、と思います。
突風を上回る速さで走れれば、駅にすぐ着く事が出来るのです。
もっと早く走りたい。もっともっと。
心臓さん。もっと強く、もっと激しく私を燃やしてください。

＊

私は三上坂町駅に向かって走ります。
この町には三上坂町駅しかない。つまり、ヤンバルの言う駅前とは三上坂町駅の前と私は考えたのです。
もし、間違っていたら……
その時は他の駅を当たるまでです。
ヤンバルのことだから、すでに駅前で待っているでしょう。私が来るまでずっと待っているつもりなのでしょう。
もし、まだヤンバルが駅前にいなければ……
ヤンバルを待たずに済んだと考えれば問題ないのです。
私の世界はヤンバルを中心に回っているのです。
＜青式当主であるナナエ様が赤式の鬼のなど相手にしては――＞
その声はイチ君ですか。好きな気持ちにに青も赤も関係ないのです。わかったら黙るのです。
＜まあ、熱くなるのはわかります。なんだかんだ言ってナナエ様も乙女ですもん。でもこれじゃまるで赤ですよ＞
今度はククさんですか。貴方の目には私が赤式のように映るのですね？　それは大変嬉しい事です。私が赤なのならヤンバルとお揃いです。だからお黙り下さい。
＜ナナエ様、この世界を色で表すならば赤ですか？　青ですか？＞
ヤオくん、こんな時に問題出すなんて随分意地悪ですね。よいでしょう答えてあげましょう。

この世界を赤とか青とか一言で表す事など出来ないのです。
「つまり？」
この世界が赤と青の二色で構成されているのなら、二つの間には他の色だってあるでしょう。選択肢は赤と青の二つだけじゃない。赤と青の間に何もない訳ではない。世界は赤でも青でもないのです。
「夜の色は？」
暗い青、もしくは黒。星が輝けばボンヤリと白が加わり、雲に覆われれば暗く重い灰色。でもこれだけじゃない。不十分。
「昼の色は？」
温かな橙色。雨が降れば薄く青く、太陽が高く上がれば燃え上がる赤。これも不十分。
この世界を私が死ぬまで表現し続けようと、全ての答えは出ないのです。赤か青かで語れるほど、万物は単純なものではないのです。
「それがナナエ様の答えですか？」
そうです。これが今の私の答えです。わかったら二度と口を開かないように！
「わかりました」
素直でよろしい！
ああ！
興が削がれました！
でも、お陰で元気が出ました！
私は私を再点火！
燃えろ！　太陽のように熱く、激しく心臓よ燃え上がれ！
鳴り響く私の心臓よ！　全身に赤を巡らせ、私を焼き尽くす時なのです！
今こそ私を赤く染め上げる時！　ヤンバルと同じ赤色になれるチャンスです！

＊

チョウザメ興ざめ。この流れ正直微妙。あはは……
異議申し立てはありますでしょうか？
あはははははは。
ああ、ナナエに成り切るのは難しいです。

18　R＊B　and？　or？　if？（後書き）

ぶっ壊れた。ぶっ壊した。

19　R＊B　堂々巡り、メグルメグル（前書き）

退屈展開

19　R＊B　堂々巡り、メグルメグル

れいぞんでている＊びたぁでべたぁ　或いは妄想する幻の話。

「本日はお日柄もよく、大変フラットな青空だったので、私の気分は非常に良い」

青式ナナエは駅前に到着する。だが、ヤンバルの姿はない。

「ヤンバルはもういない。その世界にはいないのだよナナエ君」

必死にヤンバルを探すナナエであったが、どんなに探そうと見つけることは出来なかった。

「ナナエ君、君は少し動かしづらいのだよ。余りの面倒さに私の脳みそは溶けてしまいそうだよ」

時間だけが過ぎていく。ナナエは……

「ナナエを殺すか？　殺しちまおう。デリートデリート」

ナナエは死んだ。

「あははは。死んだ死んだ。ナナエは死んだ。もう考えなくていい。丸く収まった。あは」

ナナエは死んだ。ヤンバルに会う事も出来ず、赤にもなれず、死んだ。

「これでよい。これでいいのだよナナエくん。君は死んだのだ」

止まれスイカ。

「止まりませんよ。私は誰にも止められませんよ。笑いも止まりませんよ。ふふ」

止まれスイカ。

「嫌だよ。私はこの世界の神なのだよ？　神に命令するな」

＊

はい、ストップ。その発言問題ありですよ。神様を気取るのならゴミ箱へ移しますよ。それより……

駄目ですよスイカちゃん。二人を死なせては駄目。気に入らないから削除は無しですよ。私は見てますよ。ずっとずっと見てますから勝手は許しませんよ。駄目駄目ですよ。それは確定させませんよ。私が阻止ですよ。そんな展開など私が認めませんよ。綺麗さっぱり流すよ。流す流す流す……

あはは。スイカったら馬鹿な子。モドキなのに自分を本物と思い込んでるよ。可笑しいよ。笑いが止まらないよ。あはは。あはは。あははのは。

はぁ……

一体いつからスイカちゃんはこんな子になってしまったのでしょうねぇ？　アレかなぁ？　切り取った断片が悪かったのかな？　そうだ。それに違いない。丁度私の悪いところが集まっちゃって出来たのがスイカちゃんなんですよ。そうに違いない。そうだそうだ。そのとおり。

でもスイカちゃんが反抗かぁ……　んんん。反抗期ですかね？　原因は……　思春期特有の……　いや、それはないか……　あはは。

原因は何かなぁ……　特に思い当たらない……　ってもしかしてアレか？　アレなのかな？　アレですね。うん。この前のアレだ。アレで破損したに違いない。そうだそうだ。そうに違いない。

まったく……　原因がアレだとしたらまた組み直しです。ああ、遊びを作っておいたほうがよかったなぁ……　何事にも動じず、淡々と処理実行対応変更面倒……

あ、面倒じゃない。面倒だからスイカちゃんを用意したのですから、組みなおす事なんて楽チンです。

というか、ナナエが動かしづらいって……　好き嫌いしちゃ駄目だよスイカちゃん？　君はライターマシーン三号なんだぞ？　ゴーストライターの如く仮想ライターなのだぞ？　反抗はゆるさないぞ

っ！　と……
さてさて……
原因は……
これですね。はいはい、これが原因……　だよね？
カリカリと書き直し……
ん……　よしよし……　ちょいちょいっと。
エンター！
書き換え終了。バックアップもオッケー。
よし。オッケーです。まるっとオッケーです。
再起動～♪

＊

赤い赤～♪　青い青～♪
クリアレッド～♪　ディープディープブル～♪
書くぜ！
書くよ！
書いちゃうよ～んばん！　バンバンッ　鉄砲バンバンッ！
うわぁ！　花が咲いたぞぉ！　赤い花だぁ！　赤い花が沢山だぁ！
ここは……　アレですか！　テンゴクって奴ですかそうですか！
突っ込みますよ？
突っ切っちゃうよ？
クルクルっと～♪
回転アンド固定！　レッツゴウトゥザヘブン！　天国へ私まっしぐら！
ハルカ、いっきま～す♪

＊

ストップ！
ゴメン、ハルちゃん！　間違えました！
ホント申し訳ない！　今回はハルちゃん出番ないです！　ゴメン！　本当にゴメン！
ご容赦くださいハルカ様！
で……　スイカを起動！

＊

甲本スイカｖｅｒ３
開始する場合はエンターキーを、終了する場合はスペースキー押してください。

展開中……

……

……

……

展開終了しました。

Ｒ＊Ｂ　堂々巡り　メグルメグル

「何の事かさっぱりですよ。何かあったのですか？」

受話器から聞こえるナナエのポヤヤンとしていて間抜け。私の言っている事がちゃんと伝わっているのか不安になる。
私はナナエにもわかるように説明したいが為、思考をまとめる。
あの日、私がアレを見つけた。
アレを見つけてしまったが為に、私はこの世界が終わる事を知ってしまった。
アレが私の中に住み着いたから、私は終わりの記憶を手に入れてしまったのだ。
終わりとは……
アレが持っていた記憶の中に答えがあったのだ。
終わりとは……
駄目だ。終わりを言い表せる的確な言葉が見つからない。
私は、私達は……　最初から死ぬ為だけに産み落とされたのだ。
赤式も青式も、雑種の王も全部全部、アレが歩き続けるから……
駄目だ駄目だ！　こんな言葉じゃアレを表せない！
私がアレを見つけてしまったから終わりが確定した……　いや、最初から終わる事は決まっていた……　否、アレが終わらせる為に動き出した……　違う！
アレが終わらせるのではない！　アレの上の奴が……！
アレから名を奪ったアイツは……
なんだ？　なんだ？　なんだ？
わからない。
わかりたくない。
駄目だ。アイツの正体がわからない限り、アレもわからない。アレがわからなければ、終わりを説明しようがない……
「私に何があったのかなんてナナエにはわからなくていいんだ」
今の私では終わりを捉える事が出来ない……　感じるもどかしさを表す事は……　私には出来ない。会って、一つに……
一つに戻れば。
元の私達に戻れば……

「駅前で待ってる」
私は伝える事を放棄し、電話を切る。ナナエと一つになれば終わりを伝える必要も今はない。
アレがまた歩き出したのだから、私が終わるのは決定されている。私は最初から……　この為だけに作られたのだから。
ここで私が電話を切る事もアイツが決めた事だ。ナナエと私は電車に乗り、地図にない町へ行こうと思うのも、一つに戻ろうとするのも全部アイツが……
私には自由意志はないのだろうか？　私は……　私は人形なのか？
『私は人形である？　イエス？　ノウ？』
……
『彼女はイエスを選択しました』
人形だろう。人形だ。私は私を忠実に演じるのみ。この身体は、この思考は、もう私のものではないのだ。
違う。私は私だ。それ以外の何者でもない。
『私とは何か？　言葉の限り表現せよ』
……
『回答不能。彼女は答えを出さないことを選択しました』
私が何者か？　何の為に存在する？　戦う為？　死ぬ為？　生きる為？　多すぎる、不鮮明な言葉ばかり浮かぶ。駄目だ。私とは何なのだ。答えがわからない。まとめられない。私は誰なんだ？
『提案・私は顔なき者だと認める』
……
『彼女は提案を受け入れました』
与えられた名が多すぎて、どれが最初の名かわからない……
私の顔を思い出せない。
ナナエがいないと私を思い出せない……
早く早く早く早く来てよ来て、ナナエ早くナナエ早くして、消えそうだよ、私が消えてしまう、早く早く早く……

20　三階席の断片（前書き）

4／3　誤字脱字訂正

20　三階席の断片

断片

黒をじっと眺めると、淡い白色の点が次々と浮かび上がる。
黒の中、緩やかな速度で点滅を繰り返す点を私は星のようだと思う。実際、星空なのかもしれない。
「どう？　何か見えた？」
彼はそう言った。
私が隣にいる彼に目を移すと点は黒の中へ呑まれていった。
「何が見えた？」
再び彼は同じ質問を。
彼も私と同じ黒を見ている。だけどその黒から私と彼が感じるものは違う。故に彼は私にそう尋ねる。
「君には何が見えたのだね？」
そう私は尋ね返す。
彼はしばし考えた風に瞳を閉じて、眉間に手をやる。
「人のいない町。長い事放置された町……　かな？」
彼には私の見る星空が見えていないようだった。そのかわり、その空の下の様子が見えていたようだ。
「私は点を見つけたぞ」
「点……？　どんな？」
「星の様な白い点だ」
私がそういうと彼は眼前の黒を睨む。
「ボクには見えないなぁ……　まあいいや。ある程度わかったから良しとしましょう」
「うむ。上は点、下は廃墟」
「それが終わりの姿なのかな？」

「断定するのはまだ早い。これはあくまで一例。一つの可能性」
私がそう言うと彼は、三上坂英司は「そうだった」と笑った。

＊

スイカの世界が壊れ始めた。と親切な青年、三上坂英司くんは高校校舎の屋上でジャンプの練習をしている私のところまで教えに来た。丁度その時私は千八百五回目のジャンプをしたところだった。
「聞いてますかー！　スイカの世界が壊れ始めましたよー！」
私は跳ぶのを止め、両足から感じる感覚を味わう。つま先から太ももまで綿みたいに弛緩し、丸めた新聞紙のように強張っている。手で触れれば熱く、色で表せば白熱灯だろうか？　地味なトレーニングほど遣り甲斐があるなぁと思いながら深呼吸。
「落ち着け。三上坂として恥ずかしいぞ？」
私がそう注意するのだが、彼は大変大変と騒ぐばかりで黙ろうとしない。余りにうるさいので私は彼の膝下数センチの所に蹴りを放つ。
三上坂英司は笑えるほど滑らかに転倒。肩から地面に着地。大変愉快な光景だ。
「スイカの世界が崩壊する。君は大変慌てている様子だが、崩壊ごときで驚く私ではない。あの姉妹達が語る世界は十中八九崩壊するのが前提にあり、そんな当たり前の事に驚いていたら私は務まらない。故に私は君に蹴った。わかるか？」
わかりませんよ、と足元で彼が言ったので私は彼の手を取り立ち上がらせる。
「三上坂、壊れ始めたと君は言ってますが、どの程度壊れたのか私にはわかりません。　そんな君に問題だ。世界の崩壊度をゼロから九の間で答えよ」

「十！　十！　ゼッタイ十！」
十……　ですか。ふむ。臨界点突破という事ですかねぇ？　素晴しい回答を出してくれた彼にはご褒美の蹴りを。もちろん彼は面白いぐらいつるっと転倒。また肩からですか。次はもうちょい力を入れて蹴ろうか。
「ホントヤバイんですって……！　一番目を遥かに凌ぐ壊れっぷりですよ！」
「なるほど。ユキエを上回ると……　貴方の言いたい事はわかりました。ですが、十ではよくわかりません。質問を変えましょうか。スイカの世界はどのくらい壊れたのか、身近にあるもので再現してみせよ」
「身近なものって……　ここでですか！」
「そうだ。ここでだ。何でも自由に使ってくれ」
「何にもないじゃないですか！　屋上ですよ屋上！　机も椅子も何にもないのに自由って……！」
「ゆっくりゆっくり考えてくれ。考え抜いて考え抜いて、あっと驚くような回答を出してくれ。的確で明確表現を期待している。頑張れ」
足元で呻く三上坂の視線に、いやらしさが帯びてきたので手を取り立ち上がらせる。
「……三階席さんが五人に増えるぐらいヤバイです！」
「ふむ……　私が五人になるほど大変なのか。面白い回答だ」
私が五人か……　私が五人となると……　なるほど……
「どのくらい大変なのかわからない。ついでに意味がわからん……　ご褒美だ」
私は三上坂を蹴る。三度目にして頭から着地させることに成功。ふむ、この男、まだまだ面白い……　が、飽きた。次のご褒美は少し趣向を変えていこうか。
「あのですね……　さっきから何度も蹴ってくれますが、地味に痛いんですからね……　地味に痛いんですからね……　重要だから二

度言いましたよ……」
「ふむ。痛いのか。よくわかった。だが私は自分自身を蹴れないからどのくらい痛いのかわからん。答えは出たか？」
「はい……　出ましたよ……　さっきから眉一つ動かさない三階席さんに一番確実でわかりやすい表現が……」
確実でわかりやすい表現か。ほう。楽しみだ。
「よろしい。やってみろ」
私がそう言うと、足元で這いつくばっている三上坂の目に光が戻った……　気がした。
刹那、三上坂の手が私のスカートを掴んだ。
そして、スカートを引っ張られ、ズレ落ちる――　ところだがそこは私だ。瞬間三上坂の顔面に蹴りを放つことで最悪の事態を回避。ふむ、これは焦った。
「なるほど、なかなか良い表現だ。君がそう出るとは予想もしていなかったぞ。なるほどなるほど……　このぐらい焦るほど、世界の崩壊は進んでいるのだな？　ん？　聞いているのか三上坂？」
顔面を蹴られてよほど痛かったのか、三上坂は両手で顔を押さえてのたうち回っている。よく見れば彼の両手から赤色が。出血しているようだ。
「大丈夫か？」
流石の私も心配になって三上坂に声を掛けたが、呻くばかりで何を言っているのかわからない。
「おい、何を言ってるのかわからんぞ？」
顔に張り付いた彼の片手を取って立ち上がらせる。三上坂の顔を見ると大変面白い事になっていた。
「なるほど。これは非常に高等なテクニックだ。油断したところにもう一つオチを用意していたのだな？」
三上坂の鼻は腫れ上がり、鼻孔からは血がそれはもう立派にダラダラと流れている。
三上坂英司の鼻は大変見事に折れていた。

「流石だ三上坂。身をもって崩壊度を答えたのだな？　スカートズリおろしからの鼻血という昔なつかしの少年漫画のような見事な流れ。私には勿体無いぐらい真っ当で鮮やかな運び方だ。君の表情から感じるのは、はちきれんばかりのリビドー。非常に非常にヤバイ感じだ。通報ものだ。うむ。見事な表現力だ。天晴れ」
「あの……　お願いがあるんですけど……」
「なんだ？　今なら何でも叶えてやろう」
三上坂は涙目で「鼻を元に戻してください」と言った。

＊

私は三上坂の案内でスイカの世界上空に到着。足元に広がる模型の街並み。
私は三上坂町と名づけられたこの世界をざっと確認するが、何もおかしなところは見つからなかった。
私の見る限り、世界崩壊が始まっている様子はなかった。
「三上坂くん、何もおかしくないではないか。どこが壊れているのかね？　簡潔に状況を説明せよ」
「はいはい……　基本的には崩壊は目に見えません。ではどこが壊れているか――」
「簡潔に説明せよ。落とすぞ」
「すいません……　簡潔に言います。みんな一つになろうとしています」
「一つに？　はて？　それは大変奇妙な話だ。何故そんな事に？」
分かれば苦労しませんよ、と三上坂が呟いたので私はご褒美を進呈。宙でクルクルと回転する三上坂は大変面白い。
「落ち着け三上坂。回転している場合ではない。私にも分かるように説明してくれ」

私は回転する彼の身体を足で止める。
「あー、ホントなんでこうも暴力的なのか……」
「まあまあ、落ち着こう。落ち着いて話せば分かりあえる仲じゃないか。状況を説明してくれ三上坂くん」
「……そうですね。えっと、一つに戻り始めた理由は分かりませんが、崩壊と関係しているのは確実です。何せスイカ自身が自分を見失い、それに伴いこの世界の者も狂い始めた。つまり、スイカは書く者と書かれる者の区別が出来なくなっていると……」
「わからん。意味が分からんよ」
「その気持ちはよくわかります。ですがそれ以外に表現しようがありません」
ふむ。区別……　と来ましたか。ほうほう。なるほど。
「つまり、このままスイカを放置するとどうなる？」
「自滅……　じゃないですか？　スイカは存在しなかった事になるでしょう」
自滅ねぇ……　こちらに影響なければ、ますます私には関係ない。私が手助けする理由もないし、放置が妥当だろう。よし、決めた。放置しよう。
『三階席マリアスは放置を選択』
ん？　何だ？　誰だ？
『私は三階席マリアスの選択を却下します』
選択を却下？　ふむ……
「おい三上坂、今のはなんだ？」
「……何の事です？」
なるほど。三上坂は認識できなかった……　となると私と同位の奴、私の名を知っている奴で同位はあの姉妹……
スイカ、ハルカ、ユキエの誰かか？
放置するのに何か文句があるようだな？　何故だ？
『解答拒否』
何故拒否する？

『解答拒否』
ちゃんと答えてくれるなんて、律儀な奴だなぁ？　まあいい。本来ならブチ切れ三階席超大回転スペシャルするところだが、三上坂に免じて許してやる。
「三階席さん、スイカを助ける方法分かりました？」
「助けるつもりなど最初からない」
「じゃあ何でこの世界に来たんですか？」
「ただの野次馬根性だ。意味などない」
「またまた〜　本当は違うんでしょう？」
ふむ、三上坂が誰かに動かされているな。こいつを使ってでも私をこの先に流す必要があるのか。
ふむ。ならば質問だ。
「三上坂、私がスイカを助けなければならない理由は何だ？　何故私が必要とされる？　三つ理由を挙げよ」
「一つ目、スイカは三階席マリアスに助けを望んでいる。二つ目、現時点で三階席マリアスにしかスイカを助けられない。三つ目、それが三階席の存在理由」
ふむ。存在理由を持ち出してきたか。よろしい、そこまで馬鹿にされて引き下がる私ではない。
「良かろう。お前を助けてやってもよい。だが……」
条件がある。三つほど条件がある。これをお前が呑めば私は手を貸してやる。
どうだ？　三つの条件を呑む気はあるか？
『条件が提示されていません』
提示はしない。今はしない。まだ助けてないからな。いいだろう三つぐらい。手を貸してやるんだからそのぐらい呑み込めよ。ランプの精って分かるか？　助けるのだから三つ条件を呑めって。
『思考中……』
見返りなしに私が誰かを助けると思っているのか？　馬鹿にするなよ？　何の得にもならないことを私がするわけないだろう。とい

うか、しないよ。
それが私のルールだ。
『私を助ければ私に感謝されます』
生憎私は感謝貧乏ではない。
『物語の介入を許可します』
そんなもの興味ない。
『この世界の権限を貴方に移します』
はいアウト。大切なものを簡単に差し出すな馬鹿者。何で私がお前の代わりに書かなければならないんだよ？　私は物語を書く気なんてない。
『貴方は何を望むのです？』
私の条件を呑むか呑まないか、取り合えずそれを答えろよ？　早くしないと三階席スペシャル大爆発アルティメットメーターが振り切れるぜぇ？
『思考中……』
よく考えて、じっくり考えて、貴方の答えを出したまえ。
酷い条件は出さんよ。私はフェアが大好きだからなぁ？
安心して呑んでくれたまえ。大丈夫。悪いようにはしない。
さあ、呑むよな？

＊

……呑みましょう。
その代わり、ゼッタイに綺麗に終わらせて下さい……
ゼッタイにゼッタイに……

＊

了解だ。全力で終わらしてやるよ。綺麗に終わらせるかはわからないがな。

まあ、これでも私は三階席だ。

ザックリと終わらせて流石三階席さん！　と言わせてやるよ。

ここで条件一つ目を使う。

「この物語の流れを決定しろ」

私は三上坂で遊んでてやるから、さっさと流れを決めろよ？

時間は有限だから素早く丁寧になぁ？　ははは。

21　鏡が見た世界。それらの断片

＊

「流れは決まったかね？　早くしたまえ、早く早く。君が決めかねれば世界は凍ったままだ。氷結世界だ。止まった時間の中で生きることほど退屈な事はない。仮にも君はこの世界の神だ。君がちゃんとしないと、君の分身たる三上坂町、そしてその町で生きる全てのものが混乱、混乱大混乱。即ち……」

君は神としてシッカリキッチリ、幻を描きたまえ。

「君が語らなければ、この世界は存在しないのと同じだからな」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

三階席マリアス。どこから湧いて出たのだ。

ふむ……　私の対か。ははは。面白い。私は私の対を用意したか。

それにしても口の悪い奴だ。とてもとても品のない奴だ。

嫌いなタイプだ。ははは、そういう奴は大好きだ。

三階席が私の倒すべき敵ならば、全力で君を潰すのが私の役目。

倒す為には……

やはり、言葉だ。

さあて……

種をばら撒こうか。

目玉の奥で泣き出す君。

ガラスの海、鳴けよ海鳥。

みんな見ている。みんな知ってるこの世界。

手を取り踊れ、喚け叫べ。鐘が鳴るまでクルクル踊れ。

ルビー色の君よ。

さあ、種は撒いた。
君には水を光を、言葉の栄養を。
この世界に根を伸ばし、空を支える柱となれ。

まったく……
切り替え。
再開、スタート、スターゲート。

＋＋＋

励その他もろもろを織り交ぜて私は私を助ける。
今回は私が軸となって君を助ける事になる。だから安心して終わりを始めようじゃないか。
さて……
流れが決まったようだね？
準備は整ったようだね？
終わりを始めるんだね？

よろしい。
では始めようか。
侵攻を再開。
どちらかが死ぬまで終わらぬ君と私の戦いを。
……
君と私の間に遮るものはない。
二人で一人、一人で二人。
それが今の私。
三階席マリアスを名乗る者である。

＋＋＋

彼が物語る為には沢山の私が必要となる。
だから……
「一つに還ろうじゃないか」
彼の為に私は語る。私の為に彼は語る。
「故に……」
高らかに宣戦布告を。
「沢山の私よ。私の一部よ」
私達は、みーんな、私一人から始まった。私自身も私から始まった。私は私は私は、私達の肉体、私達の精神、私の世界全てが私から始まった。
私が始まり、最初、原初。
私自身が私の原型、雛型。
私達は私一人なのだから、仲良くするのが一番なのだろう。
だが、時に戦う必要がある。それは私達が彼のパートナーで、彼の人形だからだ。
故に……
「私を返して貰おうか」
彼の為なら私は何でもする。
私は彼の複製であり、彼もまた私の一部だから。
それが彼の求める最高のパートナーだから。
狂っていようとかまいやしないよ。

＋＋＋

サヨウナラ青。

いつかまた、会う日まで。

＋＋＋

笑って。笑って。笑って。
笑って私を忘れられればいいのさ。
私を見つけられればいいのさ。
……少し語り過ぎたようだ。私は何が言いたいのか分からなくなってしまった。
視点を空に移すとしよう。これ以上恥を晒すのはゴメンだ。
こういう語りもこれで最後になれば良い。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

R＊B

三上坂町駅前。
そこにいつもの喧騒はない。聞こえるのは風の音だけ。
辺りには、沢山の人がチェスの駒のように立っている。皆呆けた表情で、改札口へと入っていく二人を見送っている。
静か、ただ静かな幻の町。
いつか、消えてしまう町。

＊

改札を抜けた二人の前に男が現れる。
てれているのか、男は頬を掻きながら笑って、二人の手を取る。
男は二人の手に小さな、本当に小さな箱を握らせて、恥ずかしそうに笑う。
二人に別れを告げた男は、二人の横を通り、改札を抜け、町へと消えていった。

＊

二人がホームに着くと同時に電車がやって来る。
扉が開き、二人は電車に乗る。
扉は閉まり、二人を乗せた電車が動き出す。
電車は二人を乗せ、町を離れた。

＊

二人がいなくなった町は、とても静かで、私は一つため息。
二人が私の町からいなくなって、少しだけ寂しいと思い、また一つため息。
改札口から彼が出てきて、三度目のため息。
これから解体する町を見て、四度目のため息と一緒に涙が一粒。
「結局、こういう終わり方なのかね？」
「結局、こういう終わり方なのでしょう」
「二人に何を渡したのかね？」
「秘密ですよ」
「君は本当に都合のいい男だ」
「それが三上坂なのでしょう」
解体が始まる。
結局、私はいつも壊すのを選んでしまう。
「あのあと二人はどうなるんでしょうかね？」
「知らんよ。私とは関係のない物語だ。私達の物語が終わった後、スイカが書くさ」
「書きますかね？」
書くさ。
あの二人はスイカ自身だからな。

22　断

断

見上げれば、空高くに顔なき者と名乗る女が一人。
目を凝らし、その女の先にいるスイカを見、スイカの一番奥からこちらを覗いているアイツを見る。
私はこの世界を観察しているアイツを知っている。知っているのだ。
この世界が幻という事をアイツは私達から隠し通さなければならないのに。
ただジッと、この世界を覗くアイツの眼には、慌てている様子は感じられない。
薄く開かれた目蓋の中で右へ左へと忙しなく動くアイツの瞳は、私達を見て楽しんでいる様に思える。
全ての元凶はアイツだ。
私はアイツから物語を守らなければならない。
どうすればアイツから世界を守れるのか？
アイツを殺す為に、私は何をすればいいのか？
――私はその方法を未だ見つけ出せずにいる。

＊

二人の去った三上坂町駅前。
マネキンのように動かなくなった人たちの中、私と三上坂は改札ゲートに腰を掛けている。このぐらいは許されてもいいはずだ。なんせ私はこれから壊さなければいけないのだから。

三上坂は相も変わらず締まりのない顔つきだったが、彼の目からは暗く重い色が滲み出ていた。
大丈夫だ、と彼に声を掛け、何も心配はないのだよ、と私は言ってみた。
「心配なんてしてませんよ」
それで良い。
「三階席さんは頑丈ですから……」
そう呟いて顔を伏せた三上坂。
「とにかく大丈夫だ。心配などいらん」
お前は笑っていろ。笑ってくれ。
「二人がいなくなったら、やっぱしこの世界は終わるのですか？」
私の考えなどつい知らず、面倒な質問をしてくるか。よろしい。答えよう。
「すでに終わっている」
言っている意味が分からない、と言いたげな三上坂の表情。
「二人が舞台を降りたのだから物語は終わった」
「終わったのなら、僕も三階席さんも動けるはずがない」
そうだ。三上坂の言う通りだ。だが私達はまだ生きている。
「未だ動く事が出来る私達。何故と聞かれたら君はどう答える？」
「物語が終わっていないから」
「君の答えは遠からず近からず……　面倒だから不正解としておこう」
「答えはなんですか」
「動けるんじゃなくて、動かされてるんだよ」
撒かれた種を刈り取らせる為に。アイツのルールの下、私達は動かされている。
「全ての芽を刈り取れずにアイツは物語を放棄した。だが芽を出した種をアイツは放置したくないようで、種を刈り取らせる為に私達を動かし続けている」
全ては私という不確かなものの為に。

その中に私も三上坂も含まれている。

＊

「さて、三上坂君。君は君の世界に帰りたまえ」
「え、なんでッスか？」
「用無しになったからだよ。今すぐ私の前から消えてくれ。涙を流し、嗚咽まじりに帰りたまえ。そして例の子に慰めてもらえ。という訳で繋ぐぞ」
パチンッと指を鳴らし私は虹色の橋を呼び出す。繋げる先は三上坂の住む世界、テンネコの世界。
「さあ帰れ、二度と私の前に姿を見せるな、消えろ、蹴るぞ」
私の言葉に納得出来ないのか反抗的な眼つきの三上坂。ご褒美に鳩尾目掛けてニーキック。
嗚咽。その直後に吐瀉。三上坂が吐き出したそれは随分と水っぽい。昼食は何も食べてなかったのだなと推測。
「吐くなんて三上坂にしてはまともな反応だ」
「ボクは頑丈じゃない三上坂なんですよ……」
確かに。君は頑丈ではない三上坂だ。
「もう一発いっとく？」
やめときます。と三上坂は呟いて、橋を渡り始める。三上坂の行く先にはガラクタばかりの汚らしい作業場。三上坂の中にある彼の店だ。
彼の本来居るべき場所。
「三階席さん」
この世界と彼の世界の丁度中間、端の中央で立ち止まった三上坂はそう言って振り返る。
「この後はどうするんですか？」

「私は私の為に、種を刈り取る」
「それが終わった後のことですよ」
後の事……？　芽を刈り終えた私がその後どうするかだと？　ふむ、考えた事もなかった。
「とても良い問題だ。天晴れ」
素晴しい問いだ。
だけど、私にその問題はちょっと難し過ぎるぞ三上坂。
「三階席さんがこっちに来てくれたらきっと楽しくなります」
ぬ……　何が言いたいのだこいつは？
「もし良かったら一度僕の店、来てくださいよ」
「誰が行くか」
そう簡単に行けるものか。
「あの世界と相性が悪い。私は三階席だという事を忘れてないか？」
「とにかく――」
――待ってます。
三上坂はそう言って再び向こう側へ歩き始める。
橋を渡り切ってあっちの世界に着いた彼の形は、私の知る三上坂ではなくなっていた。
結局、彼もアイツに操られていたのだろう。
はぁ。
アイツは何がしたいんだ。
アイツは彼の世界までも壊させようとしているのか？

＊

私は虹色の橋を閉じて、頭上遥か上空に浮かぶ女に目をやる。
空の一番上で私と三上坂のやり取りを笑っていた女。
目が合うと女は口元を歪ませ微笑む。可愛らしい、と女の声が聞

こえた気がした。
顔なき者だった者。
私を取り戻したもう一人の三階席マリアス。
もう一人の私というもの。私を語る、もう一人の私。私が壊すべき鏡の中の私。
まずは……
鏡を割る事から始めなければ……

23　終わりの二歩手前

「無知は罪……　貴方もそう思うでしょう？　彼の望みは誰にも叶えられない。貴方に居場所なんてないのだから」
煤けた灰色の空、その中心に浮かぶ顔なき者は言った。
「貴方の物語は始まることもないのにねぇ……」
女は笑う。
「私達が語られる事は永遠にないのにねぇ……」
本当に馬鹿な男、と言って甲高く笑う顔なき者。
「私達は沢山の名を持つわ。その数え切れないほどの名の中から一つ選べばそれが私の名となる。語られることも出来る」
でも。
「私達に本当の名前なんてない。形のないものを捉える為、彼は私達に仮の名を与えただけ。目には見えぬ物を見る為には至極当たり前の事……」

「でも、それだけで私達の形が保てるわけではない。独りだけで存在できない」
だから私には彼が必要なの。
「彼が私達を書かなければ、私達の事を誰にも知ってもらえないのよ？」
瞬間、顔なき者の姿が空から消える。
どこに行った？
私は灰色の空に黒を探すが、見つからない。
「誰も知らないものは、存在しない」
間違いではないよねぇ？　と左から囁く声。
「今、この瞬間も私達は自身の消失を恐れている」
貴方もそうでしょう？　今度は右から。
「今の私だってイメージを植えつけられなければ姿を保てないもの」

貴方もそうでしょう？　真後ろ。振り返るが、顔なき者はいない。
声が三上坂町全体から鳴り響いているような錯覚を起こす。
「貴方は二人を逃がしたものね。だからまた私は形を失った」
この声はどこから聞こえてくるのか？
「私は誰？　私はなんていう名前？　私って……」
どういう人間なのかな？
「私を教えてよ、私を一番知っているのは貴方でしょう？」

＊

「私はお前ではない。私のどこを見て、そんなふざけた事をいえるのか……　顔なき者よ、私にも分かるように簡潔に答えたまえ」
相も変わらず、貴方は自分騙りを始めてしまう。
貴方の騙り方はいつ聴いても、可愛らしい。
「どうした？　答える事が出来ないのか？　出来ないだろう。そうだ。答えられるわけがない。確かに私はお前に良く似ているだろう。だがそれだけでは私がお前という事にはならない。答えよ」
貴方の本当の名は質問さんだったりしてね。質問する者……　ね。
「顔なき者よ。私がお前と言いたいのなら勝手にするがいい。それよりもお前には一つ質問があってな。良いかね？」
やはり、質問さんね。
「私はお前の鏡か？　それともお前が私の鏡か？」

＊

「対の話……かしら？」
「そうだ。簡潔に述べよ」

「私はお父様の鏡よ。貴方もお父様の鏡」
「意味が分からない。簡潔ではない。蹴るぞ？」
「まあお聞きなさい。私達はお父様を映す為の鏡でしかない。お父様を映す為の二枚の鏡」
「では私達が映すのは『お父様』だろう？」
「今は違う。お父様はもう私達の前にはいない。今、私達が映すのは私自身の姿」
「鏡に映るのは鏡だ。私とお前の間には何もいない」
「本当にそう思っているのかしら？　貴方は自分自身を信じていないのに？」
「はは、意味が分からん。私は自分を信じている。私を守るのも私を信じるからだ。私は私がいなければ存在できない」
「つまり、貴方は『私』がいなければ存在出来なくなるのね？　面白いわ。自分の為に『私』という幻を守っているのね」
「お前は誰の鏡だ？」
「お父様の鏡」
「では、お前は今、何を映している？」
「貴方こそ、誰を映しているの？」

＊

私の目には何が映っているのか。
私の目に映るのは私の姿。
私は何を見ている？
鏡の中の私。
鏡に映る私は私か？
私ではない。そこには私なんていない。
私は鏡か？　否、私は私だ。

では、私とは？
私とは、何だ？
私は私に問う。
お前は誰なのだ？

＊

「私は生きている。その理由を教えて下さい」
「心臓がなる、風が頬を撫でる、太陽が肌を焼く……　私は私を考える。故に私は生きている」
「それが私達の存在証明になるの？　私はそれが信じられない。この世界が誰かが見ている夢で、貴方も私もその夢の登場人物なのかもも知れないのよ？」
「この世界が誰かの夢だとしても、私が生きていることに変わりはない」
「何故？」
「私が生きている理由なんて誰も証明できんよ。心音だとか、感覚だとか、思考だとか……　そんなもの生きる根拠になると本当のところ私は思ってない。私達が生きている理由なんて誰も知らない。誰も答えられない」
「では、貴方は何故生きているの？」
「生きる理由が必要か？　私達に意味があるとお前は思っているのか？」
「意味はないと貴方は考えている？」
「今は」
「生まれた意味も？」
「ない」
「死ぬ理由も？」

「ない。全てに意味を求めるな」
「何故意味を求めてはいけないの？」
「答えはないから」
「本当に？　嘘じゃなくて？」
「嘘ではないが本当でもない」
「わからないわ」
「お前はこの会話に意味があると？」
「あるわ。これは私と貴方の戦いだもの」
「戦い……　ね」

＊

鏡と向き合い、どれ程の時間が経ったのだろうか？　五秒？　十秒？　五分だろうか？　十分だろうか？
窓の外はまだ明るく、太陽は高く高く……　昼だろうか？　昼だろう。
もう一度私に向き合い、質問を。
「私は誰だ？　お前は誰だ？」
さあ、お前は、私は、どう答える？

＊

「終わってはいけない戦いというものを貴方は知っているかしら？」
「お前の言う『私と私の戦い』の事だろう？」
「終わってはいけない理由を貴方は知っている？」
「知らないし知りたくもない」
「そう、ならば別の話を。鬼の話を知っているかしら？」

「知らない」
「知りたい？」
「どうでもいい」
「この話も気に入らないのね？　別の話を。私の話は知っているかしら？」
「知りたくもない」
「あっそう。別の話ね。貴方の話はどう？」
「　　」
「そう。上手い事逃げたわね。では……　『　　』の話は？」
「　　」
「知りたいのね？　そう考えているのが私には分かるわ」
「そんな事は思っていない」
「今一度貴方に語りましょう。二人の物語を」

２４　ああ、蛇足（前書き）

もう駄目です……

24　ああ、蛇足

好きな時好きなだけ見ることの出来る世界。仮に名を付けると『見えない穴』でしょうか？

見えない穴というのも奇妙な話。穴が見えなければないのと同じです。見えないのですからないのです。『見えない穴』

それは今も見ることが出来ますし、貴方も見ることが出来る。ですが『見えない穴』です。

どうですか？　変な言葉ですよね。でも『見えない穴』と口にすると、私の目の奥のそのまた奥にある前頭葉で、痺れるような感覚、例えるならアルミホイルを奥歯で噛んだ時の気持ち悪さが、晴天のそよ風吹く大平原よろしく広がるのです。その奇妙な感覚を目頭、鼻、唇へと移し、喉の奥を辿って私の胃に収まった時の感覚は、まるで心臓がアルコール漬けになったような……

何が言いたいのかというと、見えない穴という表現に私自身が酔っ払っているという事。

さてさて、今回はそんな『見えない穴』から始まる二人のお話です。

……掴みはそこそこ良さそうです。良い……　ですよね？　まあいいや、次に進めましょう。

ええっと……　軽く見えない穴の説明をさせてください。

見えない穴は好きな時に好きなだけ見れます。誰でも見れます。

その穴は貴方が家から海まで行くよりも近く、見上げる空よりも近い場所にあるのです。なんと、今私が火を点けた煙草から出る煙よりも近い所にあるのです。

その穴は、心とか魂とかそういう曖昧なものじゃあありません。

幻覚でも妄想でもありません。少しだけ妄想は関係してますが……　それはある種の地図の様なもので、『見えない穴』を見つける為のナビゲーターに過ぎません。

つまりは、妄想を介して見る現実。
故に『見えない穴』……　かなぁ？

二人のお話

「二人の姿形、考え方に行動基準、生活環境に至るまで二人はとてもよく似ていて、まったく違いました」
二人のお話をする時、まず私はそう言います。それが二人のお話で何より大切な事だからです。
普段は仲がよい二人です。どこに行くにもいつも一緒。お出かけするのも、食事を作るのも食べるのも寝るのも起きるのもいつも一緒です。そんなことで仲がよいと言えるのかわかりませんが、私が見る限り仲良く見えます。
そんな仲の良い二人ですが、ふとしたきっかけでそれはもう盛大に喧嘩を始めます。
例えば三時のオヤツはゼリーにするかプリンにするか、空は何色か頬を撫でる風は硬いか柔らかいか、何をどう感じたのか、思ったのか、考えたのかという感覚の話から始まる喧嘩です。ちょっとした事から始まる言い争い……　他愛のない事から始まる意見の食い違いです。なんでそんな事で喧嘩するのか不思議に思いますが、きっと二人の間には、相手が好きで好きでしようがない気持ちがあって、よく似ているからこそ違いを生む必要があるのかもしれませんし、違うからこそ似せる必要があったのかもしれません。結局のところ、二人はお互いをどう思っているのか、私には分かりませんので私の主観という曖昧な言葉で語る以外ありません。つまり私から見た二人はよく似ていてまったく違う。喧嘩しているところしか見たことありませんが、本当はとっても仲が良い……　双子……
そう。喧嘩するほど仲が良い……　双子なのです。

見えない穴を覗けば、そんな二人の姿。
本当は『仲のよい二人』なんていないのかもしれません。二人は私の見る幻や妄想といった言葉で括られてしまう存在なのかもしれません。
しかし、本当にいないのでしょうか？　二人は幻？　妄想？
「想像できるものは現実にある物で出来ている」
そう考えると二人は本当にいるのかもしれません。
いえ……
断言しましょう。
二人は私達の世界にもいる。

＊

と……　って、危ない！　誰ですか！『フザケルナ！』って思ったのは！　この鋭利な『フザケルナ！』を思ったのは誰ですか！
文字通り言葉の凶器ですよ！　パソコンモニターから飛んで来ましたよ！　幸い避ける事に成功したから良かったものの……
ん！　各地から『フザケルナ！』がモコモコ膨れ上がっているのを感じます！　これは非常に危険です！　第一種警戒態勢！　スイッチオンっ！
急げ……　なんとしてもこの流れを守るのです……！
雪よ吹け！　春よ……　って春姉はもう来てますね。
「何事ですかスイカちゃん」
大変なのです。全国から『フザケルナ』が飛んできます！
「それはそれは……　スイカちゃんが悪ですね」
なあにニヤついてやがるんですかこのドロッと沼地サイコロ馬鹿

は！
「スイカちゃんどうしたのかしら？　私に助けを求めるなんて……」
私らしくないと。そうですかそうですか！　助けてください！
「よろしい。助けましょう」
急げ！　防壁展開用意！
雪ちゃん何をモタモタしているのです！　貴方が語らずしてどうするのですか！　今すぐ妄文の用意を！　ハルカ様！　雪ちゃん妄文展開開始までアン子さん達で凌ぎますので直に繋いでくださいお願いします！　ナツミさんは隅っこで震えていてください！　邪魔です！　表現でもしていやがり下さいませ！
「第一『フザケルナ！』が発射されました！」
何ですと！　雪ちゃん妄文用意まだですか！
「まだ駄目ね。全然駄目」
到達予想は？
「あと三分ぐらい？」
ええい！　カップラーメン！　ハルカ様！　アン子さん達はどうなりましたか！
「んんん！　指を鳴らせばどこにでも繋げますよぅ」
よろしい！　では直にアン子さんを四十人ほど庭へ！
「庭ですか？　はあ、庭に呼んでどうするんですかぁ？」
アン子さんに何とかしてもらいます！　何とかなります！　雪ちゃん妄文用意まだですか！
「そう簡単に用意できるかっての無理無理」
もう！　それでも長女ですか！　知らんですよ！
あ！　これだ！
「多重防壁展開！　合言葉は知らんですよ！」
皆さん、リピートアフターミー。
知らんですよ！
もう一回！　照れてないで叫ぶのです！
「知らんですよ！」

「駄目です！　『知らんですよ』足りません！　このままでは……！」
あああ！　そんなの知らんですよ！
「あの……　何かあったんですか？」
なんと丁度いい所にエイジアンドルカ！　エイジくんはいらんですよ！　ルカさん！　夢砕きモードお願いします！
「は、しらねえし。てかこれは酷い展開だなぁ？　ないだろ」
私も知らんですよ！　何でこうなっているのか知らんですよ！
「第一『フザケルナ』到達まで残り三十秒！」
来るの早いですよ！　何故ですか！
「三分なんてあっという間ですよ。気がつけば残り三十秒になっても可笑しくありませんよ」
なるほど。そうですかよ。了解ですよ。残り時間は？
「三十秒ですよ」
了解ですよ。三十秒でマルっと用意ですよ！　長い三十秒に感謝ですよ！
「アン子さん用意したよぉ　でも四十人全員赤い満月に釘付けですよ。虚ろな眼でボンヤリですよ」
ならば屋根に上らせるのですよ！　屋根の上で組み体操させるのですよ！
「了解ですよ。行ってきますよ」
妄文用意まだですか！
「目の前にあるだろう」

ハッとして、モニターを見ればそこには馬鹿馬鹿しいお話。
面白い？　とどこからか囁く声。その声は頭の中から響いたのか、はたまた空の上からなのか。
とりあえずその声に面白いと返事を返し、馬鹿馬鹿しいけどと呟いたところで新規保存。
ファイル名は、穴の中でしょうか？

２４　ああ、蛇足（後書き）

次のお話で終わりとさせて頂きます……

25　終点、次は。（前書き）

最後のお話。
４／２２誤字訂正

25　終点、次は。

「私はそろそろ還る事にしましょう。貴方にはもう私は必要ないはず」
鏡の中の私はそう口にして微笑んだ。
「三階席の名も貴方には必要ない。貴方は甲本スイカという名に自信を持ちなさい。先へ……」
先へ進みなさい。
「頑張って。私を守るのが貴方のルールでしょう？」
顔なき者はそう言って俯いた。
「さようなら」

＊

鏡の中で黙り込む顔なき者。
その場で一度跳んで全身の力を抜く。
今から鏡を割る。お話が終わろうとしているのだから。
私は先に進むのだから。
鏡に向かって構える。左拳を顎先に、右腕を伸ばし、相手との距離を測る。
私はお前が嫌いだ。
その目つきが嫌いだ。私をジッと見るその目の色は青か灰色。感情を読み取りにくい目つき。嫌いだ。
その腕も足も嫌いだ。くすんだ白い肌、細く簡単に折れてしまいそう。私は弱いのは嫌いだ。
何より、その冷めた顔……　大嫌いなんだよ。
一発で終わらせる。ヤンバルのように敵を仕留めそこなえば、全

部やり直しだ。躊躇してはいけない。タイムスだって跳んだのだから私にも出来る。ナナエのように自分に火を点し、ヤオのように塗りつぶせ。
私の中には皆いるんだから、大丈夫。
割るのは容易い事。考える前に動け。躊躇うな。割れ。割れ。割れ。
サヨウナラ。
またいつか。
きっとどこかで。

＊

燃える。
燃えて燃えて凍えてしまう火曜月曜。
好きか嫌いか嫌いが嫌い。自己否定も相も変わらず否定肯定工程過程仮定。
雨が降れば部屋の片隅カタストロフィ。脳内モデルチェンジ、イロハニホヘト。
嘘つきの嘘。歌を歌えば舞い散る苺。止まる事はない回転回廊刈り取れ果実。
無意味の意味。意志の味。それこそ無意味。甘く甘く、ドロリと広がる砂糖の味。息して吐け。
正しい不正。暗い明るさ、明るい黒色。崩す崩して壊して壊す。
言葉文字、文章散文。
散開。
語れど語れど未だに白紙世界。伝えず伝わる気持ちはあるか、な

いか。歩こう。
生から始まる死。刮目刮目。終わりのその時響くは喝采、手の鳴る音で眠れ眠る。
見るもの全てが極彩色。地獄天国その扉。排水溝のその先で開く音、金属質。右脳のどこかが疼き痺れ意識消失。
右目の嘘と左目の沈黙。その答え灰色美人。貴方の数字を教えて頂戴。
夏の終わりは砂漠の模倣。雨が降ればそれは愉快。

＊

全て思うように事は進まない。
私以外の私が流れを組み替えようとするから。
私は今、とってもイラついているの。邪魔しないで。噛み殺すよ？
現在時刻午後九時。これにて『R＊B』を終わりとする。これで終わりなのかと尋ねられれば『終わったのかもしれない』と私は返すつもり。だって私の物語は終わってはいないのだから。
この物語を終わりにしたことで、私を取り囲む状態は何も良くならない。むしろ悪くなるかもしれない。
でも、今はこれでいい。
とりあえず、これでいいのだ。
私は甲本スイカ。
塩をかけて食べると大変美味しい甲本スイカです。
また会える日を少し夢見て私は眠りにつく。

＊

そう画面に打ち込み、私は煙草に火を点けた。
今、終わらせた。
書き上げた文章を読み直して行くうちに、目の奥、鼻の裏側が痛くなった。原因は文章なのか、それとも単純に煙草の影響か……どちらにせよパソコンごとこの文章をドブ川に投げ捨ててしまいたい。
相も変わらず酷い文。どの言葉も鼻についてしようがない。回収も放棄。
逃げてばかりいる。そんな事では強くなれないのに。
私は未だ彼に追いつく事が出来ない。それどころか今も距離を離されている。足元にも及ばない。
最悪とまで言わないし言いたくない。だが贔屓目に見ても出来は悪い。
全ての責任は……　私にある。
やはり捨てに行くか……

＊

暗い夜道。一人ドブ川へ向かう私の頭上はるか上には大きなお月様。いたって普通のお月様。ホントつまらないお月様。
ああお月様。パソコン抱えてドブ川に向かう私を笑うのですね。私の自己嫌悪を笑うのですね。そうでしょう。貴方の悩みに比べたら私の悩みなどミジンコよりちっちゃいです。
でも、そんな目で見ないで。夜の王様独特のドロついた目つきが嫌いなんですよ。私を笑うのならもっと盛大に、声高らかに、大きな声で私を馬鹿だと罵るべきなのです。
……ああ嫌だ。月に八つ当たりしたところで、何も変わりはしないのに。

＊

ドブ川で馬鹿野郎と叫んでみた。
けれど、何も変わらない。
でも、胸の中でつっかえていた物が取れた気がした。

＊

家の玄関に魚屋のおじさんが来ていた。両手で発砲スチロールの箱を抱えている。中身は多分魚であろう。売れ残りを捌きに来たか。
魚屋のおじさんを雪姉は笑顔で対応。しかし魚を買う様子は感じられない。機嫌はとても良さそう見えるから話は長い事続くだろう。タイミングが悪かったんだよおじさん。その魚は自分で消化しな。
そんなことを考えながら靴を脱ぎ、リビングへ。春姉がソファーに寝転びながらサイコロを振っていた。目が合って春姉はニヤリと笑う。その笑い方、好きだよ。
「おじさん見た？」
おじさん。多分魚屋のおじさんの事だろう。
「あの人にサワガニ貰っちゃった」
サワガニ……　とは何だ？
「サワガニって揚げると美味しいんだってさ。今お父さんが揚げてるよ」
あぁ、サワガニ見たかったな。
ん？
父が帰ってきてるのか？

「あ、新しい子も来てるよー。空いてる部屋がなかったからスイカちゃんの部屋にぶち込んどいたよー」
また増えたのか。非常に面倒だ。というか……
「勝手に私の部屋に入れないでくれ。あと勝手に入るな。甲本スイカは警告した。以後注意せよ」
「お、なかなか板についたんじゃない？　上出来ですねぇ！　流石私の妹！　甲本スイカ！」
「黙れ沼地女」
まったく……
パソコンも私も捨てられなかったし、雪姉も春姉も面倒だし、父がまた新しいの連れてきたし、まだ見ぬ姉妹兄弟がまだまだ沢山いそうだし……
当分ネタはつきそうにない。
面倒なそれらにため息を一つ。
そして、全部鼻で笑い飛ばして、毒を吐いてやる。
それが私、甲本スイカだ。

25　終点、次は。（後書き）

最後までお付き合いありがとうございました……
もしよろしければ、感想を頂けると幸いです……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1320q/

R＊B

2011年5月16日12時10分発行